

京都教育大学

平成19年度 修士論文

青少年の生活意識及び価値観と非行接近傾向と
の関係について

学校教育専攻学校教育専修

北口 嘉憲

指導教員 内田利広

青少年の生活意識及び
価値観と非行接近傾向
との関係について

2008

北口 嘉憲

目次

歴史的概観	1
問題と目的	5
方法	8
結果	16
考察	54
結論	67
要約	68
引用文献	69

歴史的概観

近年、少年による重大犯罪が多発しており、その度に少年非行における質の変化が取り上げられて、その原因や非行のメカニズムについて関心が集まっている。犯罪・非行を説明するため古くは 18 世紀から様々な方面から研究がなされてきた。藤岡（2007）によると、犯罪・非行理論は大きく 3 つに分類でき、1 つ目は主として犯罪を効果的に防ぐ司法制度に焦点をあてた刑事政策的理論、2 つ目は主として犯罪が起こる社会の仕組みに焦点をあてた社会学的理論、3 つ目は主として主として犯罪をおこなったか、これからおこなう可能性の高い個人に焦点をあてた生物学的・心理学的理論の方向から議論されてきたとしている。藤岡はさらに、生物学的理論の多くは、犯罪者と非犯罪者を比較し、前者により多く見られる特性を取り出すという形で理論化され、また、心理学的理論の多くは社会的環境が、各個人に影響を与える過程を明らかにする上で重要な示唆を与えるとしている。一方、Bartol（2005）は、人間の行動を理解するためには行動に普遍的影響を及ぼす安定し一貫性のあるパーソナリティ特質や気質を調べるのが最も良いと考えていたが、殺人犯やレイプ犯、窃盗犯に何らかの単一なパーソナリティタイプを求め

ることにあまり成果が上がっておらず、現在は特性論的なアプローチからより認知的なアプローチへと移行しているとし、認知的側面からの理解の重要性を述べている。

非行に関する研究については、以上のような犯罪研究の知見を踏襲しつつも対象が少年であることから、独特なアプローチが取られることもある。近年の非行研究には、パーソナリティ障害や発達障害との関連性についての報告も多い。実際、重大な少年事件において鑑定の結果、パーソナリティ障害や発達障害と診断されることも少なくはなく、パーソナリティ障害の存在が、男性における全犯罪のリスクを 12.7 倍、女性における全犯罪のリスクを 49.6 倍に高める (Wallace et al., 1998; 藤岡, 2007 による) という報告もある。また、従来司法や教育の分野を中心に用いられてきた非行という概念を医学的に表現したものとして、近年、行為障害が多用されるようになった。行為障害は 1980 年米国精神医学会による精神障害の診断基準 DSM-III から採用された概念で、岡田 (2006) は従来、非行として捉えられてきた思春期の問題行動に対して、精神医療の関与が求められる大きな契機になったとしている。

このように幾多の分野から研究や実践がおこなわれてきたが、いずれも特定の理論や領域についてなされたものが多く、幅広い見地から縦断的なされたものは少ない。藤岡 (2007) は犯罪・非行は多

重な要因の相互作用であるとし、その中には危険因子と保護因子があり両側面からの研究が必要であるとしている。このように非行に関して有用な知見を得るためには継続的に多様な角度から調査をおこなう必要がある。日本においては、この様な調査・研究は公的な司法機関が主導しておこなわれている。

法務総合研究所では 1990、2000、2005 年に「青少年の生活意識と価値観に関する調査票」を用いた意識調査を少年鑑別所に入所した非行少年を対象に実施しており、この調査は我が国で唯一非行についての総合的かつ縦断的に実施されている調査である。しかし、意識の経年変化、また初犯少年と再犯少年の比較（非行深度による比較）が中心であり、一般青少年との比較はなされていない。平成 17 年度版犯罪白書（法務総合研究所，2005）では前述の非行少年と第 7 回世界青年意識調査報告書（内閣府政策統括官，2004）による一般青年（18～24 歳）との比較がおこなわれているが、比較項目が友人関係、社会、家庭生活に対する満足度と限定され、調査の対象年齢層が異なる等、十分な検討がおこなわれているとはいえない。

また、警察庁は少年による特異・凶悪事件が相次いで発生している状況を鑑み、最近の少年による特異・凶悪事件の前兆等に関する緊急調査報告書（2000）で、22 の事件（25 人）についての調査分析結果を報告している。その中では、非行を繰り返すうちに、非行が

エスカレートして凶悪な事件を引き起こしたとみられるケースと、突然凶悪な事件を引き起こしたという印象を与えるケースでは、犯行の動機、前兆行動等について異なる傾向がみられたということが報告されている。それに加え事件の背景にある問題として、家庭においては問題行動に対して放任であった、少年の変化に対して関心が薄い、学校においては教師のみていないところで例えば、ナイフを見せたり、いじめを行ったりといった本質的な状況を示していること、問題行動に精神的な病理を感じた時の対応が適切でないこと等が指摘されている。

一方、公的機関以外における調査・研究については、対象が犯罪少年であり、保護の観点から近年、処遇機関における研究協力を求めることが困難になりつつある。このことから、心理学の他の分野と比較して研究例が決して多いとはいえない。そのような中で、松井ら（2005）は最近の非行について、実際に非行的行為をする若者だけの問題ではなく、ごく普通の若者の問題であり、問題は非行に対する態度に限定されるものではなく、彼らの生き方や考え方や人間関係全般の問題であるとし、非行許容性という概念を導入し一般青少年に対して調査をおこなった。このような試みはまだ少ないが、今後の非行研究における手法として注目に値するものとする。

問題と目的

影山（2000;村松,2002 による）は現在の非行を「自己確認型」と呼び、過去の「古典的生活型」や「遊び型」と比較し、その特徴について次のように明らかにした。現代の青少年は物欲等が満たされ、過剰なものと情報にあふれた時代に育っている。青少年たちの非行や犯罪もこのような欲望や不満からの、つまり窮乏からや、生活苦からのいわば古典的犯罪よりも罪悪感に乏しい遊び型の非行に移ってきたと言われて久しい。しかし、最近では「自己確認型」ともいうべき、「空虚な自己」を埋めたり、自己の存在の確認のための犯罪が多くなってきており、動機が古典的な理解の仕方では見にくいと指摘している。

萩原（2000;村松,2002 による）は「遊び型」非行について、知育偏重教育や偏差値教育等と言った教育環境の変化は、親の過剰期待や落ちこぼれ不安を増大させ、自己の生き方の方向付けができない目標喪失感、自我同一性拡散によるものとしている。このことから、過去の非行スタイル、「古典的生活型」、「遊び型」はいずれも家庭生活、自分の生き方など生活意識における不満が引き金となり、行動化していることが容易に理解できる。しかし、現代型の「自己確認型」の非行においては影山（2000;村松,2002 による）の主張のよう

に生活意識との関わりが見えにくい。

法務総合研究所(2006)では、鑑別所入所の非行少年における 1990 から 2005 までの生活意識の変化について、社会、自分の生き方に対する満足については変化を確認できないが、家庭生活に対する満足(60%→73.7%)、友人関係に対する満足(70.2%→76.8%)は高まりつつあることを報告している。つまり、現代の非行少年において、生活上の不満が非行的思考・態度に直接影響を及ぼしているとは必ずしもいえないとがここにおいても理解できる。以上のことから、現代非行のメカニズムとして、生活における満足度は直接非行に関与せずに、その他の意識や価値観を介して影響を与えるという仮説を立てることができる。この仮説をモデル化した概念図を Fig.1 に示す。

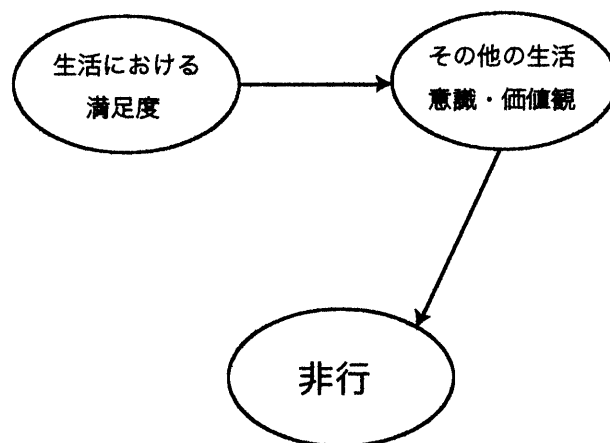


Fig.1 現代の非行における仮説モデル

また、木村(1998;村松,2002による)は現代の非行の特徴として、少年鑑別所・少年院に送致されてくる最近の非行少年の特質や特徴

の変化から「過去に非行歴の無い少年が、衝動的・突発的に重大事件を起こす例が増えている」、「覚醒剤犯罪者が増えており、非行歴の浅い少年が乱用に陥る例が増えてきている」といったこと等を挙げ、このようなことから非行少年と一般青少年の境界が曖昧になってきていることも想像できる。このことから、現代の非行について有用な知見を得るためには、非行少年のみを注視し調査するのではなく、一般青少年の生活意識についても調査をする必要があろう。

本研究では、法務総合研究所が非行少年に対して実施した「青少年の生活意識と価値観に関する調査票」を、中学、高等学校に在籍する一般青少年に実施し、また、近藤（2004）による非行接近尺度についても同時に実施する。非行接近尺度は被験者の非行的思考の深度を測定するために用意したもので、これにより測定されるものを非行接近傾向と定義する。

以上のことにより、本研究では一般青少年において、生活意識及び価値観と非行接近傾向との関係から Fig.1 の仮説モデルについて検討をおこない、さらにモデル以外の生活意識及び価値観と非行接近傾向との関係についても検討をおこなうことで、現代の非行の特徴についての有用な知見を得ることを目的とする。

方法

I. 調査対象

調査対象は、中学生及び高校生である。これは本研究において、比較対象とする法務総合研究所（2006）による調査対象の鑑別所入所少年の年齢が14歳～19歳であり、また、中学生と高校生における非行傾向の比較を考慮したためである。実施校については近畿地方A府、B県にある公立及び私立の中学・高等学校の計17校で、それらの学校において1994名の協力が得られた。その内、記入もれや記入ミスのあった460名分を分析対象から除き、有効回答は計1484名分であった。内訳は中学生637名（男子271名、女子366名）、高校生847名（男子370名、女子477名）で、男子の総数641名、女子の総数843名であった（Table1）。なお、平均年齢は14.67歳であった。

Table1 調査対象の校種と性別の内訳

	中学生	高校生	計
男子	271	370	641
女子	336	477	843
計	637	847	1484

II. 調査時期

2007年7月から10月にかけて、各学校において学級単位で実施された。

Ⅲ．実施手続き

あらかじめ調査方法や手順について教示を受けた各学級担任が調査実施者となり、配布、実施ならびに回収がおこなわれた。実施については、学級ごとに任意の時間帯に質問紙が配布され、記入はその場でおこなわれた。

また、この調査は教育活動の時間中におこなわれるため、学級経営、生徒指導にできるだけ支障がないよう、質問項目の内容及び量に配慮をおこなった。

Ⅳ．質問紙の構成

生活意識及び価値観について幅広く調査を行う為、法務総合研究所（2006）による「青少年の生活意識と価値観に関する調査票」から、家族関係、交友関係、周囲の人々との関係、地域社会、人の暮らし方、社会に対する満足度、態度・価値観、対人感情、同世代のものに対する見方、自分の生き方に対する満足度についての 64 項目を選択し、それに非行接近尺度 12 項目を加えた 76 項目を質問紙に採用した。これについて、以下に説明する。

1．青少年の生活意識と価値観に関する調査票

非行少年の家庭・交友・社会等に対する適応感、生活意識、価値観等についての総合的、体系的な調査をおこなうために作成されたもので、最近の非行少年がどのような生活意識や価値観を有してい

るか把握することを目的としている。調査内容は 1. 家庭関係、2. 交友関係、3. 周囲の人々との関係、4. 中学生活、5. 地域社会、6. 人の暮らし方、7. 社会に対する満足度、8. 態度・価値観、9. 対人感情、10. 同世代の者に対する見方、11. 非行に対する意見、12. 心のブレーキ、13. これからの生活で大切なこと、14. 自分の生き方に対する満足度から構成されており、尺度水準については名義尺度、順序尺度が混在している。採用した質問の尺度水準等について Table2 に示す。

Table2 採用した質問の尺度水準等

質問内容		尺度水準等
Q1 家族関係	家族生活に対する満足度	順序尺度 5 件法
Q2	家族との関係	順序尺度 4 件法
Q3 交友関係	友人関係に対する満足度	順序尺度 5 件法
Q4	友人との関係	名義尺度 複数選択
Q5	大切な友人	名義尺度 一つ選択
Q6 周囲の人々との関係		名義尺度 複数選択
Q7 地域社会		順序尺度 3 件法
Q8 人の暮らし方		名義尺度 一つ選択
Q9 社会に対する満足度	満足度	順序尺度 5 件法
Q10	社会に対する不満の理由	名義尺度 複数選択
Q11 態度・価値観		順序尺度 5 件法
Q12 対人感情		順序尺度 4 件法
Q13 同世代の者に対する見方		順序尺度 5 件法
Q14 自分の生き方に対する満足度		順序尺度 5 件法

そして、この中から前述の 64 項目を本調査に採用した。なお、項目の選択は中学校及び高等学校において調査可能な内容であるかということを基準に選抜した。また、選抜した項目の中に生徒指導上、不適切な表現のものもあったため、質問の内容ができるだけ変わら

ないよう、表現に変更を加えた。変更した項目については Table3 のとおりである。

Table3 質問項目の変更

	変更前	変更後
Q7	あなたの住んでいる地域や町について	→あなたの生活している環境について
Q11	サ 悪いものをやっつけるためならば、場合に よって腕力に訴えてもよい	→正義をつらぬくためには、場合によっては 力にうったえてもよい
セ	義理人情を大切にすべきだ	→人のおこなうべき正しい道や愛情を大切に すべきだ
ツ	自分の命をどうだめにしようと私の勝手だ	→自分がどうなろうと私の勝手だ

2. 非行接近尺度

近藤（2004）によって、Gray & McNaughton（2003;近藤,2004 による）の研究による行動抑制システム／行動賦活システムを基にし、非行場面の報酬刺激と罰刺激の認知において非行少年の両システムがどのように発動するか感受性を測定することを目的と作成されたものである。そして、この尺度について、近藤は非行接近傾向の強弱が非行行動の多い-少ないに強く影響を与えていることを見出している。

下位尺度は「自己中心性」6項目、「刺激興奮性」6項目、全12項目からなり、質問項目に対する回答は、「1. あてはまる（4点）」、「2. ややあてはまる（3点）」、「3. ややあてはまらない（2点）」、「4. あてはまらない（1点）」の4件法とした。また、質問内容はすべて過去形であったため、本研究では現在形に改めた。不適切な

表現の項目については、質問の内容ができるだけ変わらないよう表現に変更を加えた。変更した項目については Table4 のとおりである。

Table4 質問項目の変更

変更前	変更後
Q15 オ たしょうはめをはずしても、刺激のある方→多少はめをはずしても、気持ちを興奮させることが楽しかった	ることのほうが楽しい

α 係数は .88 で、下位尺度を含めた内的一貫性は満たされている。

また、既存の尺度との間に相関が確認されており、構成概念妥当性もほぼ満たされている。

V. 分析方法

1. 量的なデータについて

まず、既存尺度である非行接近尺度について因子分析（探索的因子分析、確認的因子分析）をおこなう。青少年の生活意識と価値観に関する調査票については尺度として作成されたものではなく、質問項目から因子構造を見いだすことは困難であると予想される。法務総合研究所（2006）は探索的因子分析の結果について以下のように報告している。

- ・ 態度・価値観の質問項目のうち数項目は自己優先的態度因子、状況依存的態度因子の 2 因子構造である。

- ・ 対人関係の質問項目においては、劣等感因子、無力感因子、不信

感因子の3因子構造である。

- ・生活満足度に関わる4項目においては1因子構造である。

本研究では、以上の結果を踏まえ、全ての項目から因子構造を見いだすのではなく、適切な項目を選択することで探索的に因子の構成をおこなうことにする。因子が構成されたら、確認的因子分析をおこなう。本研究においては、修正を加えた質問項目があるため、尺度の信頼性、因子構造の検討のためにも以上のような過程を踏むことは不可欠であると判断した。次に、因子分析結果と仮説モデルに基づいて検討モデルを立て、共分散構造分析（SEM）により分析をおこなう。

因子分析の対象とする項目は4件法と5件法の順序尺度であるが、簡便性の点から通常の因子分析をおこなう。探索的な因子分析をおこない、因子が見いだされたなら、その因子構造について仮説モデルをたてる。次に仮説モデルがデータに十分適合しているかを統計的に評価するため、確認的因子分析により因子構造の検討を行う。

因子分析の結果、各因子ともに十分な適合と内的一貫性が認められた場合、まず因子ごとに観測変数の得点を合計し尺度得点を算出する。そして、これを新たな観測変数とし、仮説モデルにあわせてモデル構成をおこなう。これについては、モデルを簡潔にするため観測変数の数を減らすこと、また、質問項目はリッカート尺度で構

成されているため項目得点を合計することにより、離散型の変数を連続型の変数に近づけることを目的としている。

モデルの検討については、まず仮説に基づき基本モデルを構成する。次に、多母集団の同時分析により校種差、性差について検討する。これについては、まず共分散構造の等質性を検討し、測定不変以上の等値制約が成立した場合、平均構造を導入したモデルを検討する。また、その結果に基づいて適宜モデルの修正をおこない最終的なモデルを選択する。

SEMによる分析において、一般的にモデルの評価は χ^2 検定および各適合度指標に基づいておこなわれるが、 χ^2 検定は標本サイズが大きくなると検出力が高くなり、ほとんどのモデルが棄却されてしまうという性質がある。標本サイズの大きい本研究においては、 χ^2 検定は標記にとどめ、モデルの評価は各適合度指標によりおこなうものとする。適合度指標としては、GFI（適合度指標）、AGFI（修正済み適合度指標）、CFI（比較適合度指標）、RMSEA（平均二乗誤差平方根）を採用することにする。また、多母集団の同時分析において、モデルを比較する際、情報基準量としてAIC（赤池情報基準量）も採用する。

2. 質的なデータについて

青少年の生活意識と価値観に関する調査票には名義尺度の質問も

含まれており、今回調査における Q 4 友人との関係、Q 5 大切な友人、Q 6 周囲の人々との関係、Q 8 人の暮らし方がこれに該当する。Q 7 地域社会については 3 件法の順序尺度であり、便宜上量的データとして扱えないこともないが、度数分布を確認したところ正規分布から逸脱した分布を持つ項目が多かったため、質的なデータとして扱うことにした。

分析手順については非行接近傾向の水準を低群、中群、高群と設定し、非行接近傾向尺度の下位尺度である自己中心性、刺激興奮性の得点から標本の群分けをおこなう。それをもとに、Q 4、Q 5、Q 6、Q 8 の項目については、（低群、中群、高群）×（選択、不選択）のクロス集計表により、 χ^2 検定をおこなう。 χ^2 検定の結果が有意である項目については、さらに残差分析をおこなう。

Q 7 の項目についても、同様に（低群、中群、高群）×（あてはまる、だいたいあてはまる、あてはまらない）のクロス集計表により、 χ^2 検定及び残差分析をおこなう。

結果

すべての結果は、SPSS 11.0J、Amos 5.0 により分析された。

I. 因子の構成

青少年の生活意識と価値観に関する調査票から選択した項目、非行接近尺度について探索的因子分析をおこなった後、確認的因子分析をおこない検討した。この際、探索的因子分析は共通性 .16 以上、因子負荷量 .35 以上を満たさない項目を除外することを基準に因子分析を繰り返し、固有値 1.0 以上であることと因子の解釈可能性を考慮し因子数を決定した。また、確認的因子分析においてはモデル識別のため、潜在変数（因子）から観測変数（質問項目）へのパスのうち 1 つの係数を 1 に、誤差変数から観測変数のパス係数をすべて 1 に固定するという制約を課した。

1. 非行接近尺度

非行接近尺度 12 項目について、最尤法・プロマックス回転により因子分析をおこない、2 因子を抽出した。項目の削除については、両因子に負荷量の高かった 2 項目について削除した。結果を Table 5 に示す。

Table5 非行接近尺度因子分析結果

項目内容	因子		
	I	II	共通性
因子I：自己中心性			
Q15キ 他の人を困らせても、自分のしたいことをする	.85	-.05	.69
Q15ク やりたいことをやるには、人が多少困ってもしかたがないと思っている	.81	-.05	.62
Q15ウ 他の人がいやな思いをしても、自分のためならやってみよう	.75	-.01	.56
Q15コ 人が嫌がっても自分の願いをかなえることを優先する	.72	-.02	.49
Q15エ 欲しいものを手に入れるためには、人から注意されても気にしない	.64	-.09	.48
Q15イ 自分のためなら、多少人の迷惑になることでもやるほうだ	.61	.17	.52
因子II：刺激興奮性			
Q15ア みんなではめをはずすときに興奮を感じるほうだ	-.15	.80	.53
Q15オ 多少はめをはずしても、興奮することのほうが楽しい	.04	.78	.65
Q15ケ 多少まずそうなことでも、いろいろな経験することは面白い	.21	.38	.28
Q15カ 計画的にやるより、その場その場の楽しさを追い求めるほうだ	.16	.38	.23
寄与率	41.13	9.34	
α 係数	.88	.71	
因子間相関			
I	—	.56	
II		—	

この因子構造は近藤（2004）の研究を支持しており、項目削除を除けば、同様な構造となっている。また、因子の命名については先行研究にならい、因子Iを『自己中心性』、因子IIを『刺激興奮性』とした。内的整合性についてはクロンバックの α 係数が、因子Iが $\alpha=.88$ 、因子IIが $\alpha=.71$ と因子Iがやや低めではあるが、信頼性は十分であると判断した。

次に探索的因子分析により得られたモデルのデータへの当てはまりを検証するため、確認的因子分析（最尤法）をおこなった。結果をTable6、Table7に示す。

Table6 非行接近尺度についての確認的因子分析
主な適合度指標

χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA/
χ^2 乗値	自由度	p値				
284.26	34	.000	.961	.937	.957	.070

標本数が大きいため χ^2 乗検定は.1%有意で棄却され、許容はされなかったが（ $\chi^2(34)=284.26, p<.001$ ）、その他の適合度指標について

は GFI=.961、AGFI=.937、CFI=.957、RMSEA=.070 と概ね良好な結

Table7 非行接近尺度についての確認的因子分析結果（最尤法）

パス係数とワルド検定				
パス	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	ワルド検定(CR)
Q1 5 イ←自己中心性	.72	.86	.03	29.59 ***
Q1 5 ウ←自己中心性	.75	.89	.03	31.34 ***
Q1 5 エ←自己中心性	.69	.93	.03	28.26 ***
Q1 5 キ←自己中心性	.82	1.00		
Q1 5 ク←自己中心性	.78	.97	.03	32.64 ***
Q1 5 コ←自己中心性	.69	.86	.03	28.31 ***
Q1 5 ア←刺激興奮性	.66	1.00		
Q1 5 オ←刺激興奮性	.82	1.28	.06	21.11 ***
Q1 5 ケ←刺激興奮性	.53	.84	.05	16.73 ***
Q1 5 カ←刺激興奮性	.50	.79	.05	15.94 ***
共分散				
自己中心性⇄刺激興奮性	.57	.22	.02	14.00 ***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

果であった。ただし、RMSEA については.070 と慣例的に適合の良否基準とされている.050 より、やや高い数値となっているが.080 を基準とする報告もあり（山本ほか,1999）、このモデルの適合度は良好であると判断した。

また、各因子（潜在変数）から引かれたパスの標準化係数（因子負荷量）は、いずれも探索的因子分析における結果同様、十分な値が得られ、そのパス係数についてのワルド検定はすべて有意（ $p<.001$ ）であった。以上の結果を踏まえ、このモデルは許容されたと判断し、非行接近尺度については自己中心性因子、刺激興奮性因子からなる斜交2因子モデルを採用した。

2. 青少年の生活意識と価値観に関する調査票

2-1. 生活満足度に関する項目群

生活上の満足感に関わる4項目を選択し、最尤法・プロマックス

回転により因子分析をおこない、1因子を抽出した。結果を Table8 に示す。

Table8 生活満足度因子分析結果

項目内容	因 子	
	I	共通性
Q14 あなたは、今の自分の生き方にどのくらい満足していますか	.81	.65
Q1 あなたは、家庭生活に、どのくらい満足していますか	.56	.32
Q3 あなたは友達づきあいに、どのくらい満足していますか	.54	.29
Q9 あなたは今の社会について、どのくらい満足していますか	.45	.20
寄与率		36.30
α 係数		.67

クロンバックの α 係数は $\alpha = .67$ とやや低い値となったが、項目数が4項目と少ないことから数値が低下したことも考えられる。また、 α 係数は①観測変数の誤差間に相関がない、②尺度全体が1因子構造、③測定が等価であるという3つの条件の下で古典テスト理論における信頼性係数と同値になる。しかし、実際にはそのような条件を満たすことはほとんどなく、 α 係数は信頼性係数の下限値であり、必ずしも測定精度が低い訳でもないのに、不当に低く見積もられる可能性があることが知られている。そこで、そのような条件に影響を受けない、McDonald (1978; 豊田, 2003 による) が提唱した ω 係数という指標を算出することにした。 ω 係数は確認的因子分析の結果から算出されるので、信頼性については後に再検討することにする。

因子構造は法務総合研究所 (2006) の結果同様、1因子構造であり、因子の命名についても選考研究にならい、『生活満足度』とした。次に、探索的因子分析により得られたモデルのデータの当てはまり

を検討するため、確認的因子分析（最尤法）をおこなった。結果を Table9、Table10 に示す。

Table9 生活満足度についての確認的因子分析

主な適合度指標						
χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA
χ^2 乗値	自由度	p値				
4.860	2	.088	.998	.992	.997	.031

Table10 生活満足度についての確認的因子分析結果（最尤法）

パス係数とワルド検定				
パス	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	ワルド検定(CR)
Q1←生活満足度	.57	1.00		
Q3←生活満足度	.53	.81	.06	14.80 ***
Q9←生活満足度	.44	.67	.05	12.83 ***
Q14←生活満足度	.81	1.44	.09	15.28 ***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

標本数が大きいため χ^2 乗検定は 5 % 有意で棄却され、許容はされなかったが（ $\chi^2(2)=4.860, p<.05$ ）、その他の適合度指標については GFI=.998、AGFI=.992、CFI=.997、RMSEA=.031 と非常に良好な値が得られ、モデルがデータに適合していることが確認された。

ここで、確認的因子分析の結果をもとに ω 係数を算出する。ここで、前述の条件のうち①観測変数の誤差間に相関がない（このモデルにおいては観測変数の誤差間に相関を想定していない）、②尺度全体が 1 因子構造は満たされているため、以下の比較的簡単な式によって算出できる。

$$\omega = \frac{\left(\sum_{i=1}^n \lambda_i\right)^2}{\left(\sum_{i=1}^n \lambda_i\right)^2 + \sum_{i=1}^n \sigma_{ei}^2}$$

ここで、 λ_i は i 番目の観測変数の因子パターンを、 σ_{ei}^2 は i 番目の観測

変数に対する誤差変数の分散を示す。算出の結果、 $\omega = .70$ であり、 α 係数より高い値となった。以上の結果から内的整合性についても低い数値ではあるが許容できる範囲にあると判断した。

また、生活満足度（潜在変数）から引かれたパスの標準化係数（因子負荷量）は、いずれも探索的因子分析における結果同様、十分な値が得られ、そのパス係数についてのワルド検定はすべて有意（ $p < .001$ ）であった。以上の結果を踏まえ、このモデルは許容されたと判断し、この 1 因子モデルを採用した。

2-2. 対人感情に関する項目群

対人感情に関わる項目から探索的に、最尤法・プロマックス回転により、因子負荷量、下位尺度の項目数、信頼性を考慮しつつ項目を選択し因子分析をおこなったところ、1 因子を抽出した。結果を Table11 に示す。

Table11 対人感情因子分析結果

項目内容	因子	
	I	共通性
Q12オ 自分は何をやってもだめな人間だという感じが	.82	.67
Q12カ 自分は世の中から取り残されているという感じが	.70	.49
Q12エ 自分の性格がいやになるという感じが	.62	.38
Q12ク 自分は意志が弱いという感じが	.48	.23
Q12ウ 心のあたたまる思いが少ないという感じが	.37	.14
	寄与率	38.21
	α 係数	.73

項目 Q12 ウについて、共通性が .14 と慣例的に項目選択の基準とされている .16 より低い値となっているが、この基準は直交回転の場合に因子負荷量 .40 以上を期待するためのものである。本研究で

は、項目選択の基準として因子負荷量.35 以上としており、この項目はその基準を満たしていること、また因子の項目数を考慮し、この項目を採用することにした。

法務総合研究所(2006)では、対人感情に関する項目群において、劣等感因子、無力感因子、不信感因子の3因子構造を報告しているが、本研究においては分析上の諸問題を考慮し1因子構造を採用することにした。また、因子の命名については、自己の無力感、劣等感などにより周囲からの孤立を感じているような項目で構成されているため、『孤独感』とした。

次に、探索的因子分析により得られたモデルのデータの当てはまりを検討するため、確認的因子分析(最尤法)をおこなった。結果を Table12、Table13 に示す。

Table12 対人感情に関する項目についての確認的因子分析

主な適合度指標						
χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA
χ^2 乗値	自由度	p値				
47.300	5	.000	.987	.962	.973	.076

Table13 対人感情に関する項目についての確認的因子分析結果(最尤法)

パス係数とワルド検定				
パス	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	ワルド検定(CR)
Q1 2エ←孤独感	.62	.81	.04	19.98 ***
Q1 2ク←孤独感	.48	.71	.04	16.01 ***
Q1 2ウ←孤独感	.37	.50	.04	12.46 ***
Q1 2オ←孤独感	.82	1.16	.05	22.53 ***
Q1 2カ←孤独感	.70	1.00		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

標本数が大きいため χ^2 乗検定は.1%有意で棄却され、許容はされなかったが ($\chi^2(5)=46.300$, $p<.001$)、その他の適合度指標について

は GFI=.987、AGFI=.962、CFI=.973、RMSEA=.076 と概ね良好な値が得られ、モデルがデータに適合していることが確認された。

また、孤独感（潜在変数）から引かれたパスの標準化係数（因子負荷量）は、いずれも探索的因子分析における結果同様、十分な値が得られ、そのパス係数についてのワルド検定はすべて有意（ $p<.001$ ）であった。以上の結果を踏まえ、このモデルは許容されたと判断し、この1因子モデルを採用した。

2-3. 態度・価値観に関する項目群

態度・価値観に関わる項目から探索的に、最尤法・プロマックス回転により、因子負荷量、下位尺度の項目数、信頼性を考慮しつつ項目を選択し因子分析をおこなったところ、1因子を抽出した。結果を Table14 に示す。

Table14 態度・価値観に関する項目の因子分析結果

項目内容	因子	
	I	共通性
Q11ツ 自分がどうなろうと私の勝手だ	.60	.31
Q11シ 世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい	.59	.22
Q11ス 自分のやりたいことをやり抜くためには、ルールを破るのもしかたがないことだ	.57	.36
Q11ウ コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい	.56	.20
Q11チ 将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている	.47	.35
Q11ソ 努力するよりも、要領よくふるまう方がよい	.45	.32
	寄与率	29.28
	α 係数	.71

クロンバックの α 係数は $\alpha=.71$ と低めの数値となったが、信頼性は許容できる範囲内にあると判断した。

法務総合研究所（2006）では、態度・価値観に関する項目群にお

いて、自己優先的態度因子、状況依存的態度因子の2因子構造を報告しているが、本研究においては分析上の諸問題を考慮し1因子構造を採用することにした。また、因子の命名については刹那的に快楽を追求し、自己と向き合わない様子をうかがえるような項目で構成されているため、『刹那的価値観』とした。

次に、探索的因子分析により得られたモデルのデータの当てはまりを検討するため、確認的因子分析（最尤法）をおこなった。結果を Table15、Table16 に示す。

Table15 態度・価値観に関する項目についての確認的因子分析

主な適合度指標						
χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA
χ^2 乗値	自由度	p値				
59.306	9	.000	.987	.969	.961	.061

Table16 態度・価値観に関する項目についての確認的因子分析結果（最尤法）

パス係数とワルド検定				
パス	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	ワルド検定(CR)
Q11ウー刹那的価値観	.56	.84	.06	14.93 ***
Q11シー刹那的価値観	.59	.88	.06	15.43 ***
Q11スー刹那的価値観	.57	.90	.06	15.11 ***
Q11ソー刹那的価値観	.45	.63	.05	12.84 ***
Q11チー刹那的価値観	.47	.75	.06	13.37 ***
Q11ツー刹那的価値観	.60	1.00		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

標本数が大きいため χ^2 乗検定は.1%有意で棄却され、許容はされなかったが（ $\chi^2(5)=59.306$, $p<.001$ ）、その他の適合度指標については GFI=.987、AGFI=.969、CFI=.961、RMSEA=.061 と概ね良好な値が得られ、モデルがデータに適合していることが確認された。

また、刹那的価値観（潜在変数）から引かれたパスの標準化係数（因子負荷量）は、いずれも探索的因子分析における結果同様、十

分な値が得られ、そのパス係数についてのワルド検定はすべて有意 ($p<.001$) であった。以上の結果を踏まえ、このモデルは許容されたと判断し、この1因子モデルを採用した。

2-4. 同世代の者に対する見方に関する項目群

態度・価値観に関わる項目から探索的に、最尤法・プロマックス回転により、因子負荷量、下位尺度の項目数、信頼性を考慮しつつ項目を選択し因子分析をおこなったところ、1因子を抽出した。結果を Table17 に示す。

Table17 同世代の者に対する見方に関する項目の因子分析結果

項目内容	因子	
	I	共通性
Q13カ 自分がよければ、少しくらい人に迷惑をかけてもかまわないと思っている人は	.73	.54
Q13ク 悪いことだと思っても、仲間と一緒にになるとやってしまう人は	.66	.44
Q13イ 気にくわないことがあると、カッとしたり、落ち込んだりする人は	.61	.38
Q13オ 大切なことであっても、まじめに考えずにごまかしてしまう人は	.60	.36
Q13ア 今、この場が楽しければそれでよいと思っている人は	.55	.31
寄与率		40.34
α 係数		.77

クロンバックの α 係数は $\alpha=.77$ と妥当な信頼性を有することが確認された。また、抽出された因子は、同世代の行動に対して肯定、否定に関わらず、問題であると感じているかを問う項目から構成されているため、『同世代への非行イメージ』と命名した。

次に、探索的因子分析により得られたモデルのデータの当てはまりを検討するため、確認的因子分析（最尤法）をおこなった。結果

Table18 同世代の者に対する見方に関する項目についての確認的因子分析

主な適合度指標						
χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA
χ^2 乗値	自由度	p値				
22.089	5	.001	.994	.982	.990	.048

Table19 同世代の者に対する見方に関する項目についての確認的因子分析結果（最尤法）

パス係数とワルド検定				
パス	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	ワルド検定(CR)
Q13ア←同世代への非行的イメージ	.55	.60	.03	17.91 ***
Q13イ←同世代への非行的イメージ	.61	.76	.04	19.60 ***
Q13オ←同世代への非行的イメージ	.60	.73	.04	19.11 ***
Q13カ←同世代への非行的イメージ	.73	1.00		
Q13ク←同世代への非行的イメージ	.66	.83	.04	20.77 ***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

を Table18、Table19 に示す。

標本数が大きいいため χ^2 乗検定は 1 % 有意で棄却され、許容はされなかったが ($\chi^2(5)=22.089, p<.01$)、その他の適合度指標については GFI=.994、AGFI=.982、CFI=.990、RMSEA=.048 と良好な値が得られ、モデルがデータに適合していることが確認された。

また、同世代への非行イメージ（潜在変数）から引かれたパスの標準化係数（因子負荷量）は、いずれも探索的因子分析における結果同様、十分な値が得られ、そのパス係数についてのワルド検定はすべて有意（ $p<.001$ ）であった。以上の結果を踏まえ、このモデルは許容されたと判断し、この 1 因子モデルを採用した。

Ⅱ．非行接近傾向における生活意識及び価値観の影響モデルの検討

因子分析の結果、各因子において十分な適合と内的一貫性が認められたため、因子ごとに観測変数の得点を合計することで尺度得点を算出し、これを新たな観測変数とした。

非行接近尺度は因子分析の結果、自己中心性因子、刺激興奮性因

子の2因子構造であることが確認され、それぞれ高い因子間相関が確認された。そこで、尺度内の両因子はさらに高次の因子から影響を受けていると仮定し、その2次因子を『非行接近傾向』と命名し、観測変数として、生活満足度因子から算出した『生活満足度』、孤独感因子から算出した『孤独感』、利他的価値観から算出した『利他的価値観』、同世代への非行イメージ因子から算出した『非行イメージ』を採用し、非行接近傾向における生活意識及び価値観の影響モデル（分析モデル）を作成した（Fig.2）。

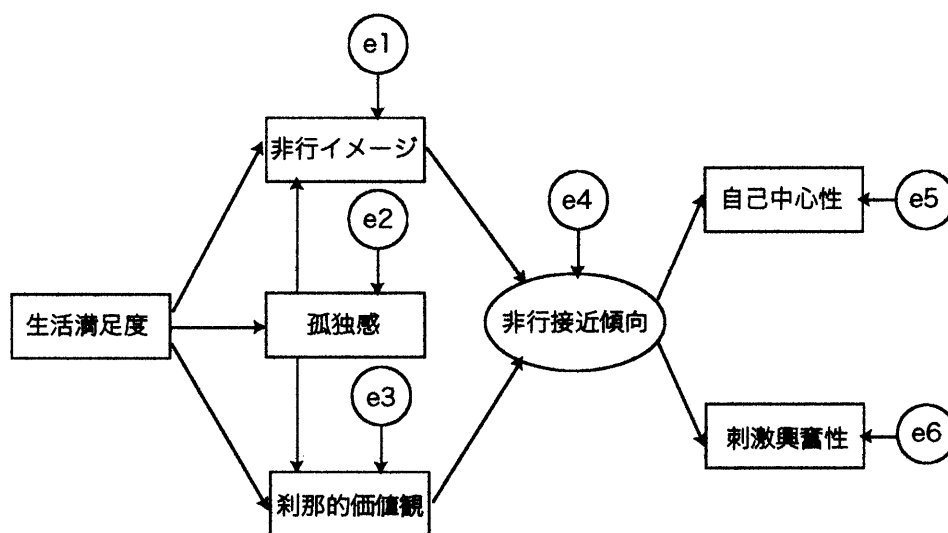


Fig.2 非行接近傾向における生活意識及び価値観の影響モデル（分析モデル）

また、モデル識別のため、非行接近傾向から自己中心性へのパス係数を1に固定した。

1. 校種間の差の検討

1-1. 共分散構造の等質性の検討

生活意識及び価値観（モデルにおいては生活満足度、孤独感、利他的価値観、非行イメージ）が非行接近傾向に及ぼす影響が中学生、高校生で異なるのかを検討するため、中学生、高校生でグループに分け、2母集団の同時分析をおこなった。まず、等値条件については配置不変モデル（モデル0）から順に制約が強くなるよう、5つのモデルを構成した。

分析は適合度指標の算出と等値条件の検定をおこなった。各モデルの等値条件を Table23、Table24 に示す。

Table23 分析モデルの中学生・高校生比較における共分散構造の等質性の検定（各モデルの等値条件）
等値制約

モデル0	配置不変（制約を課さないモデル）
モデル1	（弱）測定不変（中学生・高校生間で非行接近傾向のすべての因子バタンの等しいモデル）
モデル2	モデル1 + 中学生・高校生間ですべてのパス係数が等しいモデル
モデル3	モデル2 + 中学生・高校生間で生活満足度の分散が等しいモデル
モデル4	モデル3 + 中学生・高校生間で非行イメージ、孤独感、利他的価値観、非行接近傾向の誤差分散が等しいモデル
モデル5	中学生・高校生間ですべての母数が等しいモデル

Table24 分析モデルの中学生・高校生比較における共分散構造の等質性の検定（最尤法）

モデル	χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC	等値条件の検定		
	χ^2 乗値	自由度	p値						χ^2 乗値	自由度	p値
モデル0	33.414	12	.001	.993	.974	.984	.035	93.414	—	—	—
モデル1	40.286	13	.000	.991	.971	.980	.038	98.286	モデル1-0	6.872	1 .009
モデル2	53.832	20	.000	.988	.974	.975	.034	97.832	モデル2-1	13.546	7 .060
モデル3	54.415	21	.000	.988	.975	.975	.033	96.415	モデル3-2	.583	1 .445
モデル4	62.941	25	.000	.986	.976	.972	.032	96.941	モデル4-3	8.526	4 .074
モデル5	70.723	27	.000	.984	.975	.968	.033	100.723	モデル5-4	7.783	2 .020

標本数が大きいと χ^2 乗検定はいずれも棄却され、許容はされなかったが、適合度指標はいずれも良好な値を示しており、どのモデルもデータとの適合がよいといえる。その中でも、モデル0は複数の競合モデルと比較するための指標であるAICの値がもっとも良好（AIC=93.414）で、多くせの指標においても非常に良い値（CFI=.993、AGFI=.974、CFI=.994、RMSEA=.035）を示している。また、等値条

件においては、モデル 1 と有意な差が見られたため、モデル 0（配置不変モデル）が最も適切なモデルであると判断した。

モデル 0（配置不変モデル）は中学生、高校生間でパス図は同様であるが母数に制約をおかないモデルである。つまり、中学生、高校生という 2 つの集団において同じモデルを適用できるが、各生活意識及び価値観が非行接近傾向におよぼす影響は集団によって異なるということである。つまり、中学生と高校生を 1 つの母集団とは見なせない。

1-2. 配置不変モデルにおける中学生・高校生の差の検討

中学生・高校生、それぞれの集団において、配置不変が確認されたため、これを Fig.2 の非行接近傾向における生活意識及び価値観

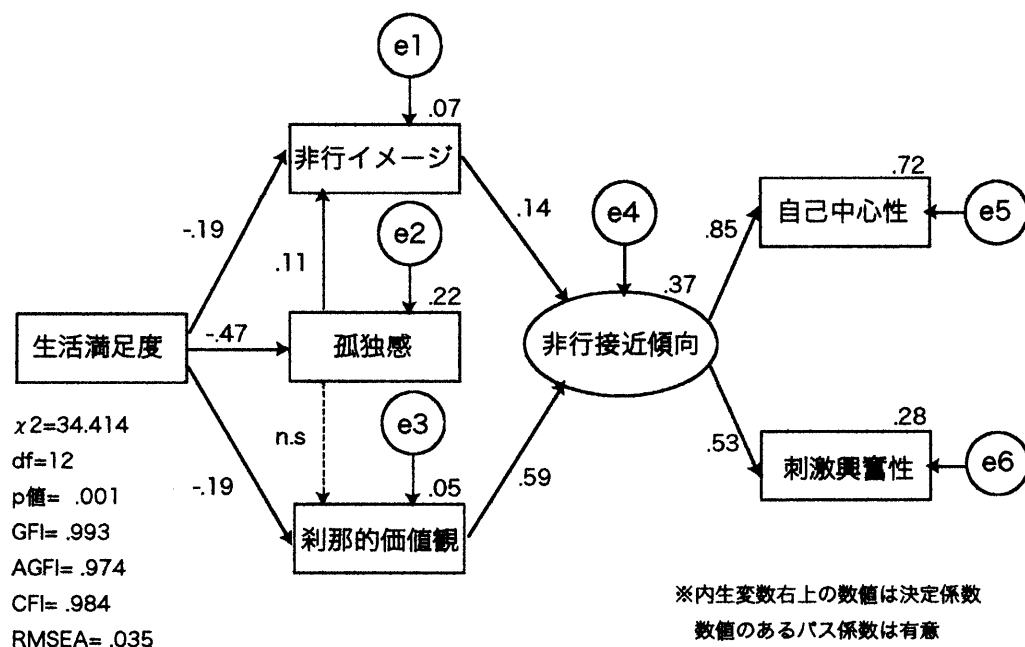


Fig.3 中学生における分析モデル（最尤法、標準化解）

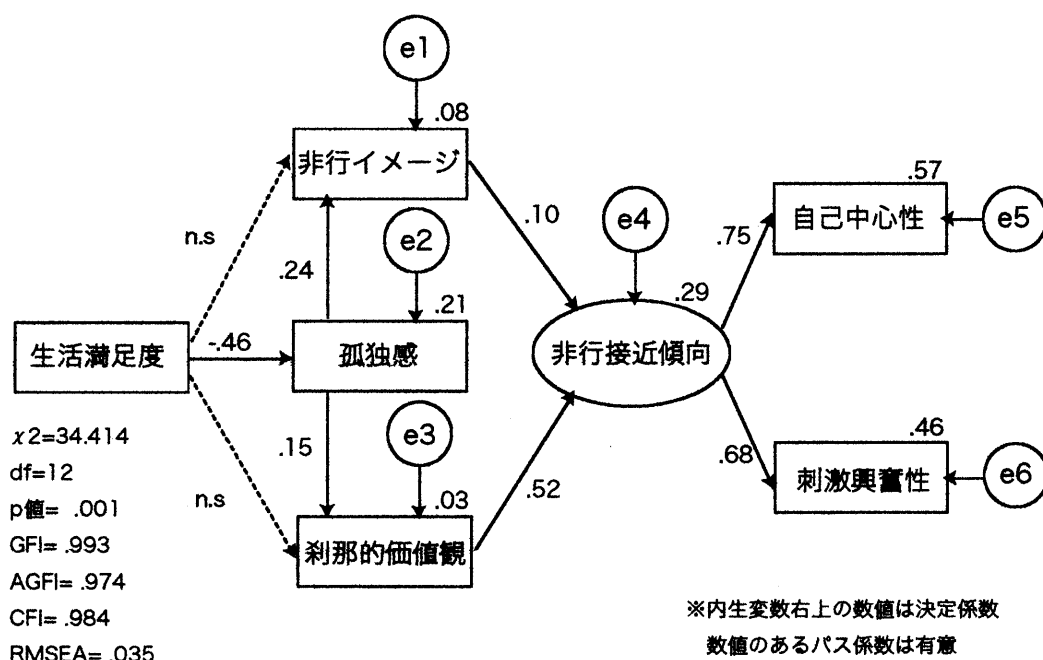


Fig.4 高校生における分析モデル（最尤法、標準化解）

Table25 分析モデルの中学生・高校生比較モデル（配置不変モデル）の分析結果（最尤法）

パス係数	標準化解		非標準化解		標準誤差		ワルド検定(CR) 等値制約・差の検定		
	中学生	高校生	中学生	高校生	中学生	高校生	中学生	高校生	
生活満足度→孤独感	-.47	-.46	-.48	-.45	.04	.03	-13.38***	-14.89***	中=高
生活満足度→非行イメージ	-.19	-.70	-.23	-.08	.05	.04	-4.41***	-1.90 n.s	中>高*
生活満足度→利他的価値観	-.19	-.06	-.28	-.09	.07	.06	-4.37***	-1.59 n.s	中>高*
孤独感→利他的価値観	.06	.15	.08	.22	.06	.06	1.41 n.s	3.91***	中=高
孤独感→非行イメージ	.12	.24	.13	.29	.05	.04	2.66**	6.49***	中<高*
非行イメージ→非行接近傾向	.14	.10	.13	.09	.04	.03	3.67***	2.69**	中=高
利他的価値観→非行接近傾向	.59	.53	.42	.36	.03	.03	14.60***	12.67***	中=高
非行接近傾向→自己中心性	.85	.76	1.00	1.0	—	—	—	—	
非行接近傾向→刺激興奮性	.53	.68	.44	.64	.05	.06	8.94***	11.40***	中<高*
決定係数（重相関係数の平方）									
孤独感	.22	.21							
利他的価値観	.05	.03							
非行イメージ	.07	.08							
非行接近傾向	.37	.29							
刺激興奮性	.28	.47							
自己中心性	.72	.57							
間接効果									
生活満足度→利他的価値観	-.03	-.07	-.04	-.10					
生活満足度→非行イメージ	-.05	-.11	-.06	-.13					
生活満足度→非行接近傾向	-.16	-.09	-.17	-.09					
孤独感→非行接近傾向	.05	.10	.06	.10					
総合効果									
生活満足度→利他的価値観	-.22	-.13	-.33	-.19					
生活満足度→非行イメージ	-.25	-.18	-.29	-.21					
生活満足度→非行接近傾向	-.16	-.09	-.17	-.09					
孤独感→非行接近傾向	.05	.10	.06	.10					

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

の影響モデル（分析モデル）に適用し検討をおこなった。その結果
およびモデルの標準化解を Fig.3、Fig.4、 Table25 に示す。

1) 中学生における分析モデ

生活満足度から非行イメージ、孤独感、利那的価値観へのパスの
標準化係数はすべて有意で負の値を示しており、生活満足度の低下
が非行イメージ、孤独感、利那的価値観を高めることが確認された。
その影響の度合いについては生活満足度から孤独感へのパス ($\beta = -.47, p < .001$) が最も強く、非行イメージへのパス ($\beta = -.19, p < .001$)、
利那的価値観へのパス ($\beta = -.19, p < .001$) は弱いものとなっている。

孤独感から非行イメージへのパスの標準化係数は正の値 ($\beta = -.19, p < .001$) で、孤独感の高まりが非行イメージをやや高めること
が確認されたが、孤独感から利那的価値観へのパス ($\beta = -.09, n.s$)
は有意ではなく影響が認められなかった。

非行接近傾向への非行イメージ、利那的価値観からのパスの標準
化係数はすべて正の値で非行イメージ、利那的価値観の高まりは非
行接近傾向を高めることが確認された。その影響の度合いについて
は利那的価値観から非行接近傾向へのパス ($\beta = -.59, p < .001$) は強く、
非行イメージからのパス ($\beta = -.14, p < .001$) は弱いものとなっている。

孤独感の決定係数 ($R^2 = .22$) から、孤独感は生活満足度により 22%
説明され、非行イメージの決定係数 ($R^2 = .07$)、利那的価値観の決定

係数 ($R^2=.05$) からは、生活満足度、孤独感より、それぞれ 7 %、5 % とほとんど説明されておらず、モデル外の変数から大きく影響を受けていることが認められた。非行接近傾向の決定係数 ($R^2=.37$) からは、非行接近傾向が生活満足度、非行イメージ、孤独感、利他的価値観により 37% 説明されることが認められた。

非行接近傾向への総合効果は、生活満足度から非行接近傾向 ($\beta = -.16$) については、生活満足度の低下が非行接近傾向を高めるがその影響度は低いこと、孤独感から非行接近傾向 ($\beta = .05$) については、孤独感は非行接近傾向に対しほとんど影響を与えていないことが確認された。

2) 高校生の分析モデル

生活満足度から孤独感へのパスの標準化係数 ($\beta = -.46, p < .001$) は有意で負の値を示しており、生活満足度の低下が孤独感を高めることが確認されたが、非行イメージへのパス ($\beta = -.07, p < n.s$)、利他的価値観へのパス ($\beta = -.06, p < n.s$) は有意ではなく影響が認められなかった。

孤独感から非行イメージ、利他的価値観へのパスの標準化係数はすべて有意な正の値で、孤独感の高まりが非行イメージ、利他的価値観を高めることが確認された。その影響の度合いについては孤独感から非行イメージへのパス ($\beta = .24, p < .001$)、利他的価値観への

パス ($\beta = -.15, p < .001$) とともに弱いものとなっている。

非行接近傾向への非行イメージ、刹那的価値観からのパスの標準化係数はすべて有意な正の値で非行イメージ、刹那的価値観の高まりは非行接近傾向を高めることが確認された。その影響の度合いについては刹那的価値観から非行接近傾向へのパス ($\beta = -.52, p < .001$) は強く、非行イメージからのパス ($\beta = -.10, p < .001$) は弱いものとなっている。

孤独感の決定係数 ($R^2 = .21$) から、孤独感は生活満足度により 21% 説明され、非行イメージの決定係数 ($R^2 = .08$)、刹那的価値観の決定係数 ($R^2 = .03$) からは、生活満足度、孤独感よりそれぞれ 8%、3% とほとんど説明されておらず、モデル外の変数から大きく影響を受けていることが認められた。非行接近傾向の決定係数 ($R^2 = .29$) からは、非行接近傾向が生活満足度、非行イメージ、孤独感、刹那的価値観により 29% 説明されることが認められた。

非行接近傾向への総合効果は、生活満足度から非行接近傾向 ($\beta = -.09$)、孤独感から非行接近傾向 ($\beta = .10$) とともに、低い値でありその影響度は非常に低いことが確認された。

3) 中学生モデルと高校生モデルの比較

生活満足度から非行イメージ、孤独感、刹那的価値観への影響を比較してみると、中学生モデルにおいては生活満足度から非行イメ

ージ、利他的価値観への直接効果は有意であるが、高校生モデルでは有意ではない。また、中学生モデルにおける生活満足度から非行イメージ、利他的価値観の間接効果はそれぞれ、-.05、-.03 で、高校生モデルにおける生活満足度から非行イメージ、利他的価値観の間接効果はそれぞれ、-.11、-.07 と高校生のほうが間接効果は高くなっている。また、中学生モデル、高校生モデルにおけるパス係数の差の検定においても、生活満足度から非行イメージ、利他的価値観両方のパスにおいて中学生の方が有意に高くなっている。このことから、中学生モデルにおいては生活満足度の低下が、直接、非行イメージ、利他的価値観を高めるが、高校生モデルにおいては孤独感を介して高めていることが認められた。

また、非行接近傾向の決定係数は高校生モデル ($R^2=.29$) より中学生モデル ($R^2=.37$) のほうが高く、中学生の方がこのモデルの独立変数から説明される割合が高く、高校生の方がモデル外の変数から説明される割合が高いことが確認された。

非行接近傾向から刺激興奮性のパスの標準化係数は中学生モデルが $\beta=.53$ 、高校生モデルが $\beta=.68$ で差の検定についても $p<.05$ で有意であった。このことから、中学生モデルにおいて非行接近傾向の高まりは刺激興奮性と比較して自己中心性に大きく影響を与えるが、高校生モデルにおいては刺激興奮性の影響が高まることが確認され

た。

2. 性差の検討

2-1. 共分散構造の等質性の検討

生活意識及び価値観（モデルにおいては生活満足度、孤独感、利他的価値観、非行イメージ）が非行接近傾向に及ぼす影響が男子、女子で異なるのかを検討するため、男子、女子でグループに分け、2母集団の同時分析をおこなった。まず、等値条件については配置不変モデル（モデル0）から順に制約が強くなるよう、5つのモデルを構成した。

分析は適合度指標の算出と等値条件の検定をおこなった。各モデルの等値条件を Table26、Table27 に示す。

標本数が大きいいため χ^2 乗検定はいずれも棄却され、許容はされな

Table26 分析モデルの男女比較における共分散構造の等質性の検討（各モデルの等値条件）

		等値制約	
モデル0	配置不変（制約を課さないモデル）		
モデル1	（弱）測定不変（男女間で非行接近傾向のすべての因子バタが等しいモデル）		
モデル2	モデル1 + 男女間ですべてのパス係数が等しいモデル		
モデル3	モデル2 + 男女間で生活満足度の分散が等しいモデル		
モデル4	モデル3 + 男女間で非行イメージ、孤独感、利他的価値観、非行接近傾向の誤差分散が等しいモデル		
モデル5	男女間ですべての母数が等しいモデル		

Table27 分析モデルの男女比較における共分散構造の等質性の検討（最尤法）

モデル	χ^2 乗検定			GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC	等値条件の検定		
	χ^2 乗値	自由度	p値						χ^2 乗値	自由度	p値
モデル0	35.090	12	.000	.992	.973	.983	.036	95.090	—		
モデル1	38.333	13	.000	.992	.973	.982	.036	96.333	モデル1-0	3.243	1 .072
モデル2	49.947	20	.000	.989	.977	.979	.032	93.947	モデル2-1	11.615	7 .114
モデル3	51.694	21	.000	.989	.977	.978	.031	93.694	モデル3-2	1.746	1 .186
モデル4	58.711	25	.000	.987	.978	.976	.030	92.711	モデル4-3	7.017	4 .135
モデル5	65.435	27	.000	.985	.977	.973	.031	95.435	モデル5-4	6.724	2 .035

かったが、適合度指標はいずれも良好な値を示しており、どのモデ

ルもデータとの適合がよいといえる。その中でも、モデル4は複数の競合モデルを比較するための指標であるAICの値がもっとも良好（AIC=67.795）で、多くの指標においても非常に良い値（CFI=.980、AGFI=.980、CFI=.980、RMSEA=.031）を示している。また、等値条件の検定においても、モデル3と有意な差が見られず、モデル5と有意な差が見られたため、モデル4が最も適切なモデルであると判断した。

モデル4は非行接近傾向の因子パタン、すべてのパス係数、生活満足度の分散、非行イメージ・孤独感・刹那的価値観・非行接近傾向の誤差分散が等しいモデルで、これは、自己中心性・刺激興奮性の誤差分散以外は男女間で等質であることが確認された。つまり、モデル4は構成概念の等質性（測定不変性）を十分に満たしたモデルであるといえる。

2-2. 平均構造の等質性の検討

モデル選択の結果、測定不変性が確認されたため、モデル4に対して平均構造を導入し、等質性を検討した。平均比較のための制約として、因子を測定している観測変数（自己中心性、刺激興奮性）の切片を男女間で揃え、男子において非行接近傾向の平均を0に固定した。

モデルの構成に先立ち、モデル4の結果に基づいて予め探索的に

分析をおこない、モデル 40 からモデル 45 までを構成した。

分析はモデルの χ^2 検定、CFI、RMSEA、ACI の算出、等値条件の検定をおこなった。各モデルの等値条件を Table28、分析結果を Table29 に示す。

Table28 分析モデルの男女比較（モデル 4）における平均構造の検定（等値条件）

モデル	等値制約
モデル 4 0	等値制約を課さないモデル
モデル 4 1	男女間で生活満足度の平均が等しいモデル
モデル 4 2	モデル 4 1 + 男女間で非行イメージの切片が等しいモデル
モデル 4 3	モデル 4 2 + 男女間で利他的価値観の切片が等しいモデル
モデル 4 4	モデル 4 3 + 男女間で孤独感の切片が等しいモデル
モデル 4 5	男女間ですべての平均・切片が等しいモデル

Table29 分析モデルの男女比較（モデル 4）における平均構造の等質性の検定（最尤法）

モデル	χ^2 乗検定			CFI	RMSEA	AIC	等値条件の検定		
	χ^2 乗値	自由度	p 値				χ^2 乗値	自由度	p 値
モデル 40	58.839	26	.000	.977	.029	114.839	—		
モデル 41	58.885	27	.000	.977	.028	112.885	モデル 41-40	.045	1 .831
モデル 42	59.115	28	.001	.978	.027	111.115	モデル 42-41	.230	1 .631
モデル 43	62.288	29	.000	.976	.028	112.288	モデル 43-42	3.173	1 .075
モデル 44	97.254	30	.000	.952	.039	145.254	モデル 44-43	34.966	1 .000
モデル 45	101.764	31	.000	.949	.039	147.764	モデル 45-44	4.510	1 .034

標本数が大きいいため χ^2 乗検定はいずれも棄却され、許容はされなかったが、適合度指標はいずれも良好な値を示しており、どのモデルもデータとの適合がよいといえる。その中でも、モデル 42 は複数の競合モデルを比較するための指標である AIC の値がもっとも良好（AIC=111.115）で、多くの指標においても非常に良い値（CFI=.978、RMSEA=.027）を示している。また、等値条件の検定においても、モデル 41 と有意な差が見られず、モデル 43 と有意な差が見られたため、モデル 42 が最も適切なモデルであると判断した。

モデル 42 は生活満足度の平均、非行イメージの切片が男女間で等しく、生活満足度・非行イメージの平均構造について男女間で等質

であることが確認された。

2-3. モデル 42 における性差の検討

モデル 42 は男女間でモデルに非常に強い制約がかかっており、共分散構造、平均構造のほとんどが等質であるため男子モデル、女子モデルについて同時に検討をおこなう。

1) モデル全般の検討

モデル 42 の分析結果を Fig.5、Table30 に示す。

モデル中のすべてのパスは有意であり、共分散構造、平均構造のほとんどが等質であるため、男女で異なる数値を示すのは、非行

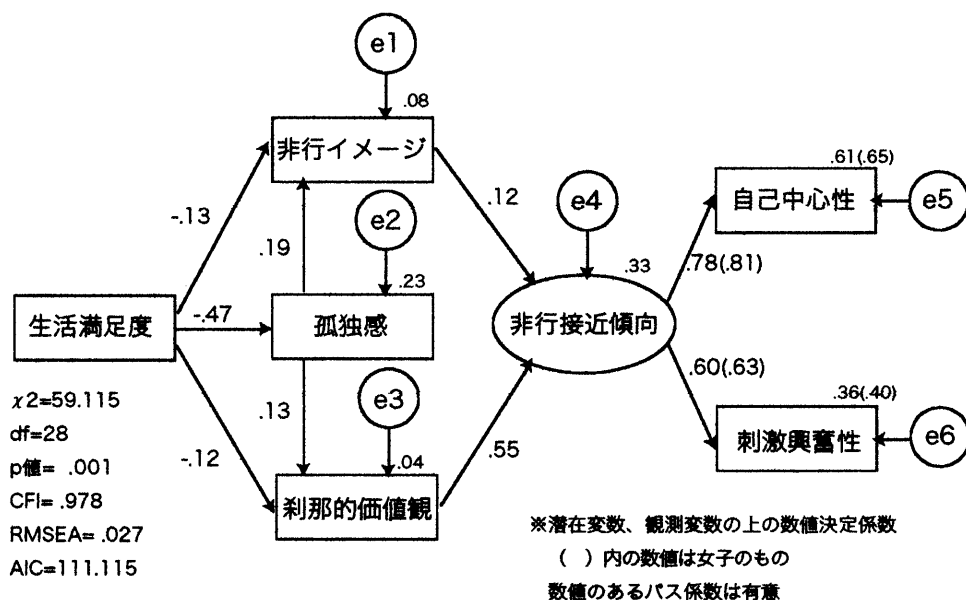


Fig.5 分析モデル (モデル42、最尤法、標準化解)

接近傾向からのパスにおける標準化係数とその観測変数の決定係数のみである。しかし、これらは実際には等値制約されており、その差異は標準化係数算出時の、制約されていない誤差分散の影響を受

Table30 分析モデルの男女比較モデル（モデル42）の分析結果（最尤法）

パス係数	標準化解		非標準化解		標準誤差		ワルド検定(CR) 等値制約・差の検定		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
生活満足度→孤独感	-.48	-.48	-.47	-.47	.02	.02	-20.76***	-20.76***	男=女
生活満足度→非行イメージ	-.13	-.13	-.15	-.15	.03	.03	-4.52***	-4.52***	男=女
生活満足度→利他的価値観	-.12	-.12	-.17	-.17	.04	.04	-4.12***	-4.12***	男=女
孤独感→利他的価値観	.13	.13	.19	.19	.04	.04	4.40***	4.40***	男=女
孤独感→非行イメージ	.20	.20	.23	.23	.03	.03	6.95***	6.95***	男=女
非行イメージ→非行接近傾向	.12	.12	.10	.10	.02	.02	4.32***	4.32***	男=女
利他的価値観→非行接近傾向	.55	.55	.39	.39	.02	.02	19.16***	19.16***	男=女
非行接近傾向→自己中心性	.78	.81	1.00	1.00	—	—	—	—	
非行接近傾向→刺激興奮性	.60	.63	.55	.55	.04	.04	15.00***	15.00***	男=女
平均									
生活満足度			13.91	13.91	.08	.08	178.69***	178.69***	男=女
切片									
孤独感			19.58	20.40	.33	.33	59.06***	62.25***	男<女*
利他的価値観			18.25	17.85	.99	1.02	18.41***	17.54***	男・女n.s
非行イメージ			17.99	17.99	.79	.79	22.81***	22.81***	男=女
非行接近傾向			.00	-.36	—	.17	—	-2.13*	男>女*
自己中心性			3.10	3.10	.59	.59	5.30***	5.30***	男=女
刺激興奮性			5.39	5.39	.39	.39	13.78***	13.78***	男=女
決定係数（重相関係数の平方）									
孤独感	.23	.23							
利他的価値観	.05	.05							
非行イメージ	.08	.08							
非行接近傾向	.33	.33							
刺激興奮性	.36	.40							
自己中心性	.61	.65							
間接効果									
生活満足度→利他的価値観	-.06	-.06	-.09	-.09					
生活満足度→非行イメージ	-.09	-.09	-.11	-.11					
生活満足度→非行接近傾向	-.13	-.13	-.13	-.13					
孤独感→非行接近傾向	.09	.09	.10	.10					
総合効果									
生活満足度→利他的価値観	-.18	-.18	-.26	-.26					
生活満足度→非行イメージ	-.22	-.22	-.26	-.26					
生活満足度→非行接近傾向	-.13	-.13	-.13	-.13					
孤独感→非行接近傾向	-.09	-.09	.10	.10					

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

けたものである。

生活満足度から非行イメージ、孤独感、利他的価値観へのパスの標準化係数はすべて負の値を示しており、生活満足度の低下が非行イメージ、孤独感、利他的価値観を高めることが確認された。その影響の度合いについては生活満足度から孤独感へのパス（ $\beta = -.47, p < .001$ ）が最も強く、非行イメージへのパス（ $\beta = -.13, p < .001$ ）、

利那的価値観へのパス ($\beta = -.12, p < .001$) は弱いものとなっている。

孤独感から非行イメージ、利那的価値観へのパスの標準化係数はすべて正の値で、孤独感の高まりが非行イメージ、利那的価値観を高めることが確認された。その影響の度合いについては孤独感から非行イメージへのパス ($\beta = -.19, p < .001$)、利那的価値観へのパス ($\beta = -.13, p < .001$) とともに弱いものとなっている。

非行接近傾向への非行イメージ、利那的価値観からのパスの標準化係数はすべて正の値で非行イメージ、利那的価値観の高まりは非行接近傾向を高めることが確認された。その影響の度合いについては利那的価値観から非行接近傾向へのパス ($\beta = -.59, p < .001$) は強く、非行イメージからのパス ($\beta = -.12, p < .001$) は弱いものとなっている。

孤独感の決定係数 ($R^2 = .23$) から、孤独感は生活満足度により 21% 説明され、非行イメージの決定係数 ($R^2 = .08$)、利那的価値観の決定係数 ($R^2 = .04$) からは、生活満足度、孤独感より、それぞれ 8%、3% とほとんど説明されておらず、モデル外の変数から大きく影響を受けていることが認められた。非行接近傾向の決定係数 ($R^2 = .33$) からは、非行接近傾向が生活満足度、非行イメージ、孤独感、利那的価値観により 33% 説明されることが認められた。

非行接近傾向への総合効果は、生活満足度から非行接近傾向 ($\beta = -.13$)、孤独感から非行接近傾向 ($\beta = .09$) とともに低い値でありそ

の影響度は非常に低いことが確認された。

2) 平均構造における性差の検討

このモデルにおいて、生活満足度の平均と非行イメージの切片については等質性が確認されており、孤独感、利他的価値観、非行接

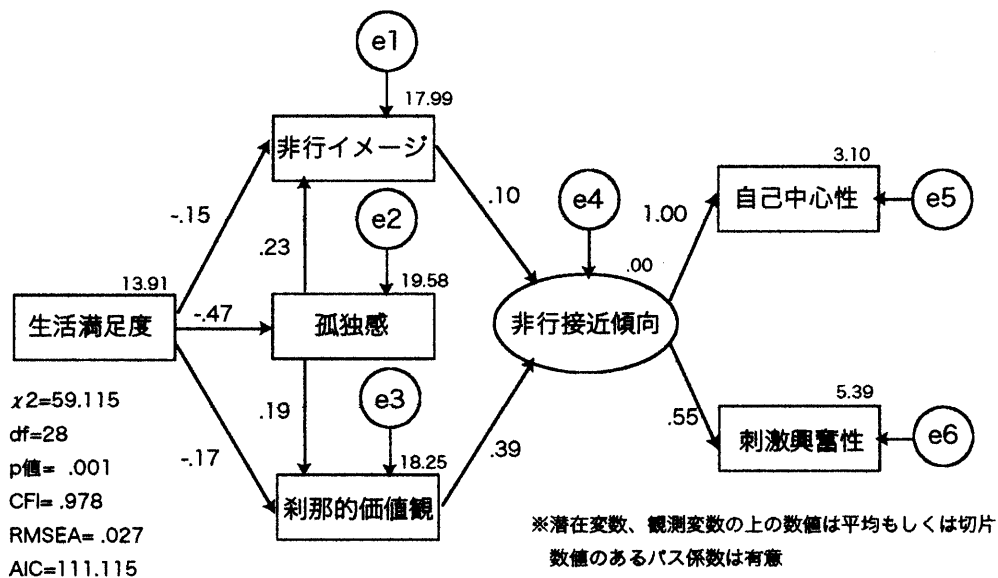


Fig.6 男子における分析モデル（最尤法、非標準化解）

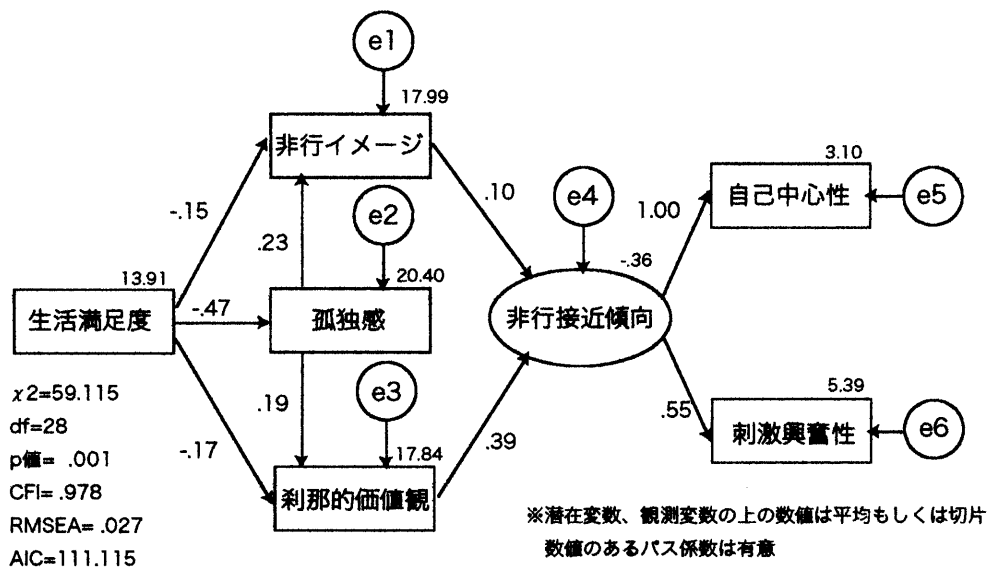


Fig.7 女子における分析モデル（最尤法、非標準化解）

近傾向の切片について性差の検討をおこなった。平均構造を確認するため、男子モデル・女子モデルそれぞれの非標準解を Fig.6、Fig7 にそれぞれ示す。

孤独感の切片については男子 19.58、女子 20.40 で、差の検定においても有意 ($p<.05$) であった。このことから、女子のほうが孤独感をやや強く感じていることが確認された。

利他的価値観の切片については男子 18.25、女子 17.84 で、男子のほうがやや高い数値であるが、差の検定においては有意とは判定されなかった。

非行接近傾向の切片については男子 0 (モデルへの平均構造導入時、0 に固定)、女子は -.36 で男子のほうが有意 ($p<.05$) に高い値であった。であった。非行接近傾向は構成概念であり観測されるものではないが、平均構造の導入により、男子のほうが非行接近傾向は強いことが確認された。

Ⅲ. その他の生活意識及び価値観の検討

以上の検討項目以外の生活意識及び価値観について、非行接近傾向の水準と選択度数の独立性を検討するため χ^2 検定をおこなった。

水準の構成にあたり、非行接近傾向は潜在変数であるが、便宜的に観測変数 (自己中心性、刺激興奮性) の合算得点を算出し、その推定値とした。次に非行接近傾向得点をそれぞれ平均値 $\pm 1/2$ 標準偏

差の値で区切り、データを低群、中群、高群の3群に分けた。

1. 友人関係

友人関係に関する11項目について非行接近傾向水準(低群、中群、高群)×項目の選択(選択、不選択)の条件により、3×2クロス集計表を作成し χ^2 検定をおこなった。また、検定結果が有意であった項目については残差分析をおこなった。その分析結果をTable31に示す。

Table31 友人関係について非行接近傾向の水準による比較 χ^2 検定及び残差分析の結果

		選択	不選択	χ^2 検定	有意確率p
1 悲しいことがあったら話を聞いてもらう	低群	251	195	$\chi^2 = 2.83$ n.s.	0.244
	中群	292	280		
	高群	252	214		
2 相手にけっこう気をつかっている	低群	195 (2.6)**	251 (-2.6)**	$\chi^2 = 6.66$ *	0.036
	中群	210 (-1.3)	362 (1.3)		
	高群	170 (-1.2)	296 (1.2)		
3 あまり深刻な相談はしない	低群	181	265	$\chi^2 = 3.05$ n.s.	0.217
	中群	215	357		
	高群	163	303		
4 付き合っているのは、何か得ものがあるからだ	低群	73 (-2.7)**	373 (2.7)**	$\chi^2 = 14.71$ ***	0.001
	中群	112 (-0.9)	460 (0.9)		
	高群	123 (3.6)**	343 (-3.6)**		
5 おたがいに張り合う気持ちはある	低群	86 (-2.7)**	360 (2.7)**	$\chi^2 = 9.35$ **	0.009
	中群	138 (0.2)	434 (-0.2)		
	高群	130 (2.5) *	336 (-2.5) *		
6 けんかをし合える	低群	136	310	$\chi^2 = 2.89$ n.s.	0.236
	中群	160	412		
	高群	153	313		
7 何を言わなくても、分かり合えている	低群	129	317	$\chi^2 = 0.84$ n.s.	0.657
	中群	151	421		
	高群	126	340		
8 おたがいの性格は裏の裏まで知っている	低群	102	344	$\chi^2 = 1.43$ n.s.	0.489
	中群	116	456		
	高群	107	359		
9 自分のすべてをさらけ出すわけではない	低群	185	261	$\chi^2 = 0.91$ n.s.	0.635
	中群	250	322		
	高群	191	275		
10 おたがい悪いところは悪いと言い合える	低群	208 (1.3)	238 (-1.3)	$\chi^2 = 10.32$ **	0.006
	中群	222 (-3.2)**	350 (3.2)**		
	高群	223 (2.0) *	243 (-2.0) *		
11 一緒にいるときでも、別々のことをしている	低群	64 (-1.6)	382 (1.6)	$\chi^2 = 10.70$ **	0.005
	中群	85 (-1.6)	487 (1.6)		
	高群	100 (3.3)**	366 (-3.3)**		

df=2 *p<.05, **p<.01, ***p<.001 n.s.:not significant

※ ()の数値は調整済み残差である

χ^2 検定の結果、11項目中6項目が有意であった。

『2相手にけっこう気をつかっている』($\chi^2(2)=6.66, p<.05$)においては残差分析の結果、低群において選択の残差が有意($d=2.6, p<.01$)であった。これにより、相手にけっこう気をつかっている者は非行接近傾向の低群において偶然に期待される度数より有意に多いことが認められた。

『付き合っているのは何か得るものがあるからだ』($\chi^2(2)=14.71, p<.001$)においては残差分析の結果、低群、高群において選択の残差が有意(低群 $d=-2.7, p<.01$ 、高群 $d=3.6, p<.01$)であった。これにより、何か得るものがあるから友人と付き合っている者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に少なく、高群においては有意に高いことが認められた。

『おたがいに張り合う気持ちがある』($\chi^2(2)=9.35, p<.01$)においては残差分析の結果、低群、高群において選択の残差が有意(低群 $d=-2.7, p<.01$ 、高群 $d=2.5, p<.05$)であった。これにより、おたがいに張り合う気持ちを持っている者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に少ないが、高群においては有意に高いことが認められた。

『おたがいに悪いところは悪いと言い合える』($\chi^2(2)=10.32, p<.01$)においては残差分析の結果、中群、高群において選択の残差が有意

(中群 $d=-3.2$, $p<.01$ 、高群 $d=2.0$, $p<.05$) であった。これにより、おたがいに悪いところは悪いと言い合えると感じている者は非行接近傾向中群において偶然に期待される度数より有意に少ないが、高群においては有意に多いことが認められた。

『一緒にいるときでも、別々のことをしている』($\chi^2(2)=10.70$, $p<.01$) においては残差分析の結果、高群において選択の残差が有意($d=3.3$, $p<.01$) であった。これにより、一緒にいるときでも、別々のことをしている者は非行接近傾向高群において偶然に期待される度数より有意に多いことが認められた。

2. 大切だと思う友人のタイプ

大切だと思う友人のタイプに関する6項目について非行接近傾向水準(低群、中群、高群)×項目の選択(選択、不選択)の条件に

Table32 大事だと思う友人のタイプについて非行接近傾向水準による比較 χ^2 検定及び残差分析の結果

		選択	不選択	χ^2 検定	有意確率p
1 いつもそばにいて相手になってくれる人	低群	100	346	$\chi^2=5.23$ n.s	0.073
	中群	108	464		
	高群	115	351		
2 他の人に言えないことを聞いてくれる人	低群	82	364	$\chi^2=1.21$ n.s	0.546
	中群	121	451		
	高群	94	372		
3 競争相手となって自分を伸ばしてくれる人	低群	46	400	$\chi^2=2.77$ n.s	0.251
	中群	58	514		
	高群	35	431		
4 いろいろな情報を教えてくれる人	低群	12	434	$\chi^2=5.93$ n.s	0.052
	中群	26	564		
	高群	28	438		
5 困ったときに助けてくれる人	低群	159 (2.1) *	287 (-2.1) *	$\chi^2=11.74$ **	0.003
	中群	192 (1.2)	380 (-1.2)		
	高群	120 (-3.4) **	346 (3.4) **		
6 興味や趣味が似ている人	低群	47 (-1.6)	399 (1.6)	$\chi^2=6.65$ *	0.036
	中群	67 (-0.9)	505 (0.9)		
	高群	74 (2.5) *	392 (-2.5) *		

df=2 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ n.s: not significant

※ () の数値は調整済み残差である

より、 3×2 クロス集計表を作成し χ^2 検定をおこなった。また、検定結果が有意であった項目については残差分析をおこなった。その分析結果を Table32 に示す。

χ^2 検定の結果、6項目中2項目が有意であった。

『困ったときに助けてくれる人』（ $\chi^2(2)=11.74$, $p<.001$ ）においては残差分析の結果、低群、高群において選択の残差が有意（低群 $d=2.1$, $p<.05$ 、高群 $d=-3.4$, $p<.01$ ）であった。これより、困ったときに助けてくれる人を大切な友人と考える者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に多いが、高群においては有意に少ないことが認められた。

『興味や趣味が似ている人』（ $\chi^2(2)=6.65$, $p<.05$ ）においては残差分析の結果、高群において選択の残差が有意（ $d=2.5$, $p<.05$ ）であった。これより、興味や趣味が似ている人を大切な友人と考える者は非行接近傾向高群において偶然に期待される度数より有意に多いことが認められた。

3. 周囲の人との関係

周囲の人々との関係に関する4項目について父親、母親、兄弟姉妹、祖父母、親戚の人、同性の友達・仲間、異性の友達・仲間、先輩、先生、近所の人、その他、誰もいないから該当者を選択する（複数選択可）ように構成されており、非行接近傾向水準（低群、中群、

Table33 周囲の人々との関係について非行接近傾向の水準による比較 χ^2 検定及び残差分析の結果

		選択		不選択	χ^2 検定	有意確率p
気楽に話ができると思う人	父親	低群	139 (1.8)	307 (-1.8)	$\chi^2 = 7.66$ *	0.022
		中群	168 (0.9)	404 (-0.9)		
		高群	109 (-2.7)**	357 (2.7)**		
	母親	低群	283 (4.2)**	163 (-4.2)**	$\chi^2 = 33.54$ ***	0.000
		中群	328 (1.3)	244 (-1.3)		
		高群	209 (-5.5)**	257 (5.5)**		
	兄弟姉妹	低群	210 (3.0)**	236 (-3.0)**	$\chi^2 = 9.66$ **	0.008
		中群	228 (-0.9)	344 (-0.9)		
		高群	174 (-2.1)*	292 (2.1)*		
	祖父母	低群	110 (2.7)**	366 (-2.7)**	$\chi^2 = 7.33$ *	0.026
		中群	105 (-1.5)	467 (1.5)		
		高群	87 (-1.1)	379 (1.1)		
悩みをうちあけられると思う人	異性の友達・仲間	低群	106 (-1.3)	340 (1.3)	$\chi^2 = 15.26$ ***	0.000
		中群	129 (-2.4)*	443 (2.4)*		
		高群	152 (3.9)**	314 (3.9)**		
	先輩	低群	76 (0.9)	370 (-0.9)	$\chi^2 = 6.58$ *	0.037
		中群	73 (-2.5)*	499 (2.5)*		
		高群	85 (1.8)	381 (-1.8)		
	父親	低群	69 (1.2)	377 (-1.2)	$\chi^2 = 7.93$ *	0.019
		中群	89 (1.5)	483 (-1.5)		
		高群	47 (-2.8)**	419 (2.8)**		
	母親	低群	220 (4.9)**	226 (-4.9)**	$\chi^2 = 47.13$ ***	0.000
		中群	243 (1.6)	329 (-1.6)		
		高群	129 (-6.5)**	337 (6.5)**		
注意されたら言うことを聞くと 思う人	兄弟姉妹	低群	100 (2.5)*	346 (-2.5)*	$\chi^2 = 11.21$ **	0.004
		中群	111 (0.6)	461 (-0.6)		
		高群	65 (-3.1)**	401 (3.1)**		
	異性の友達・仲間	低群	77 (-0.7)	369 (0.7)	$\chi^2 = 14.11$ **	0.001
		中群	84 (-2.8)**	488 (2.8)**		
		高群	110 (3.6)**	356 (-3.6)**		
	父親	低群	253 (3.1)**	193 (-3.1)**	$\chi^2 = 37.41$ ***	0.000
		中群	316 (2.9)**	256 (-2.9)**		
		高群	181 (-6.1)**	285 (6.1)**		
	母親	低群	286 (5.7)**	160 (5.7)**	$\chi^2 = 68.01$ ***	0.000
		中群	322 (2.1)*	250 (2.1)*		
		高群	176 (-7.9)**	290 (7.9)**		
こんな人になりたい人	兄弟姉妹	低群	73 (2.7)**	373 (-2.7)**	$\chi^2 = 9.23$ *	0.010
		中群	72 (-0.2)	500 (0.2)		
		高群	45 (-2.5)*	421 (2.5)*		
	祖父母	低群	168 (3.8)**	278 (-3.8)**	$\chi^2 = 15.40$ ***	0.000
		中群	166 (-1.1)	406 (1.1)		
		高群	122 (-2.6)**	344 (2.6)**		
	親戚の人	低群	88 (3.9)**	358 (-3.9)**	$\chi^2 = 15.67$ ***	0.000
		中群	71 (-1.6)	501 (1.6)		
		高群	53 (-2.2)*	413 (2.2)*		
	先輩	低群	212 (2.9)**	234 (-2.9)**	$\chi^2 = 8.68$ *	0.013
		中群	229 (-1.1)	343 (1.1)		
		高群	180 (-1.7)	286 (1.7)		
先生	先生	低群	226 (4.9)**	220 (-4.9)**	$\chi^2 = 47.63$ ***	0.000
		中群	249 (1.5)	323 (-1.5)		
		高群	134 (-6.5)**	332 (6.5)**		
	近所の人	低群	64 (3.8)**	382 (-3.8)**	$\chi^2 = 17.31$ ***	0.000
		中群	53 (-0.6)	519 (0.6)		
		高群	29 (-3.2)**	473 (3.2)**		
	誰もいない	低群	17 (-0.9)	429 (0.9)	$\chi^2 = 10.79$ **	0.005
		中群	17 (-2.3)*	555 (2.3)*		
		高群	33 (3.2)**	433 (-3.2)**		
	母親	低群	144 (5.0)**	302 (-5.0)**	$\chi^2 = 35.65$ ***	0.000
		中群	137 (0.1)	435 (-0.1)		
		高群	72 (-5.1)**	394 (5.1)**		

df=2 *p<.05, **p<.01, ***p<.001 n.s.:not significant

※ ()の数値は調整済み残差である

高群) × 項目の選択 (選択、不選択) の条件により、3 × 2 クロス集計表を作成し χ^2 検定をおこなった。また、検定結果が有意であった項目については残差分析をおこなった。その分析結果を Table33 に示す。

『気楽に話ができると思う人』については父親 ($\chi^2(2)=7.66, p<.05$)、母親 ($\chi^2(2)=33.54, p<.001$)、兄弟姉妹 ($\chi^2(2)=9.66, p<.01$)、祖父母 ($\chi^2(2)=7.33, p<.05$)、異性の友達仲間 ($\chi^2(2)=15.26, p<.001$)、先輩 ($\chi^2(2)=6.58, p<.05$) が有意であった。残差分析の結果、父親を選択した者は高群 ($d=-2.7, p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、母親を選択した者は低群 ($d=2.5, p<.05$) で有意に多く、高群 ($d=-5.5, p<.01$) で有意に少ない。兄弟姉妹を選択した者も低群 ($d=3.0, p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-2.1, p<.05$) で有意に少なく、祖父母を選択した者は低群 ($d=2.7, p<.01$) で有意に多い。また、異性の友達・仲間を選択した者は中群 ($d=-2.4, p<.05$) で偶然に期待される度数より有意に少なく、高群 ($d=3.9, p<.05$) で有意に多く、先輩を選択した者は中群 ($d=-2.5, p<.05$) で有意に少ない。

『悩みをうちあけられる人』については父親 ($\chi^2(2)=7.93, p<.05$)、母親 ($\chi^2(2)=47.13, p<.001$)、兄弟姉妹 ($\chi^2(2)=11.21, p<.01$)、異性の友達仲間 ($\chi^2(2)=15.26, p<.001$) が有意であった。残差分析の結

果、父親を選択した者は高群 ($d=-2.8$, $p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に少なく、母親を選択した者は低群 ($d=4.9$, $p<.01$) で有意に多く、高群 ($d=-6.5$, $p<.01$) で有意に少ない。また、兄弟姉妹を選択した者は低群 ($d=2.5$, $p<.05$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-3.1$, $p<.01$) で有意に少なく、また、異性の友達・仲間を選択した者は中群 ($d=-2.8$, $p<.01$) で有意に少なく、高群 ($d=3.6$, $p<.01$) で有意に多い。

『注意されたら言うことを聞く人』については父親 ($\chi^2(2)=37.41$, $p<.001$)、母親 ($\chi^2(2)=68.01$, $p<.001$)、兄弟姉妹 ($\chi^2(2)=9.23$, $p<.01$)、祖父母 ($\chi^2(2)=15.40$, $p<.001$)、親戚の人 ($\chi^2(2)=15.67$, $p<.001$)、先輩 ($\chi^2(2)=8.68$, $p<.05$)、先生 ($\chi^2(2)=47.63$, $p<.001$)、近所の人 ($\chi^2(2)=17.31$, $p<.001$)、誰もいない ($\chi^2(2)=10.79$, $p<.01$) が有意であった。残差分析の結果、父親を選択した者は低群 ($d=3.1$, $p<.01$)、中群 ($d=2.9$, $p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-6.1$, $p<.01$) で有意に少なく、また母親を選択した者も低群 ($d=5.7$, $p<.01$)、中群 ($d=2.1$, $p<.05$) で有意に多く、高群 ($d=-7.9$, $p<.01$) で有意に少ない。兄弟姉妹を選択した者は低群 ($d=2.7$, $p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-2.5$, $p<.05$) で有意に少なく、また祖父母を選択した者は低群 ($d=3.8$, $p<.01$) で有意に多く、高群 ($d=-2.6$, $p<.01$) で有意に少ない。親戚を選択し

た者は低群 ($d=3.9$, $p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-2.2$, $p<.05$) で有意に少なく、先輩を選択した者は低群 ($d=2.9$, $p<.01$) で有意に多い。先生を選択した者は低群 ($d=3.8$, $p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-3.2$, $p<.01$) で有意に少なく、また近所の人を選択した者は低群 ($d=3.8$, $p<.01$) で有意に多く、高群 ($d=-3.2$, $p<.01$) で有意に少ない。誰もいないを選択した者は中群 ($d=-2.3$, $p<.05$) で有意に少なく、高群 ($d=3.2$, $p<.01$) で有意に多い。

『こんな人になりたいと思う人』については母親 ($\chi^2(2)=35.65$, $p<.001$) のみが有意であった。残差分析の結果、母親を選択した者は低群 ($d=5.0$, $p<.01$) で偶然に期待される度数より有意に多く、高群 ($d=-5.1$, $p<.01$) で有意に少ない。

4. 生活している環境

大切だと思う友人のタイプに関する5項目について非行接近傾向水準(低群、中群、高群)×項目の選択(あてはまる、だいたいあてはまる、あてはまらない)の条件により、 3×3 クロス集計表を作成し χ^2 検定をおこなった。また、検定結果が有意であった項目については残差分析をおこなった。その分析結果を Table34 に示す。

Table34 生活している環境について非行接近傾向の水準による比較 χ^2 検定及び残差分析の結果

		あてはまる	だいたいあてはまる	あてはまらない	χ^2 検定	有意確率p
ア 近所の大人の人は、道であつたら、気軽に私に声をかけてくれる	低群	130	217	99	$\chi^2=6.69$ n.s	0.153
	中群	151	285	136		
	高群	115	217	134		
イ 地域の中で、アダルトビデオやエッチな雑誌を買ったり、借りるのは簡単だ	低群	28 (-3.0)**	55 (-3.1)**	363 (4.7)**	$\chi^2=59.02$ ***	0.000
	中群	42 (-2.6)**	91 (-0.9)	439 (2.5)*		
	高群	76 (5.7)**	106 (4.0)**	284 (-7.2)**		
ウ 地域の中で、酒やたばこを買うのは簡単だ	低群	84 (-2.9)**	106 (-1.5)	256 (3.8)**	$\chi^2=47.26$ ***	0.000
	中群	110 (-3.3)**	166 (1.9)	296 (1.1)		
	高群	159 (6.3)**	119 (-0.5)	188 (-5.0)**		
エ 子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は注意してやめさせるだろう	低群	154 (4.3)**	190 (-4.3)**	102 (0.6)	$\chi^2=29.12$ ***	0.000
	中群	138 (-2.0)*	328 (3.8)**	106 (-2.4)*		
	高群	109 (-2.1)*	241 (0.3)	116 (1.9)		
オ 子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は学校や警察に連絡するだろう	低群	67 (2.1)*	185 (-0.6)	194 (-0.8)	$\chi^2=13.57$ **	0.009
	中群	60 (-1.7)	270 (2.8)**	242 (-1.7)		
	高群	55 (-0.4)	177 (-2.4)*	234 (2.7)**		

df=4 *p<.05, **p<.01, ***p<.001 n.s.:not significant

※ ()の数値は調整済み残差である

χ^2 検定の結果、5項目中4項目が有意であった。

『地域の中で、アダルトビデオやエッチな雑誌を買ったり、借りるのは簡単だ』($\chi^2(4)=59.02$, $p<.001$)、『地域の中で、酒やタバコを買うのは簡単だ』($\chi^2(4)=47.26$, $p<.001$)においては残差分析の結果、すべての群において「あてはまる」の残差が有意(低群 $d=-3.0$ $d=-2.9$, $p<.01$ 、中群 $d=-2.6$ $d=-3.3$, $p<.01$ 、高群 $d=5.7$ $d=6.3$, $p<.01$)であった。これより、地域の中でアダルトビデオやエッチな雑誌、酒やたばこを買うことは簡単だと考える者は非行接近傾向低群、中群において偶然に期待される度数より有意に少ないが、高群においては有意に多いことが認められた。

『子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は注意してやめさせるだろう』($\chi^2(4)=29.12$, $p<.001$)においては残差分析の結果、すべての群において「あてはまる」の残差が有意(低群 $d=4.3$,

$p<.01$ 、中群 $d=-2.0$, $p<.05$ 、高群 $d=-2.1$, $p<.05$) であった。これより、子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は注意してやめさせるだろうと考える者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に多いが、中群、高群においては有意に少ないことが認められた。

『子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は学校や警察に連絡するだろう』($\chi^2(4)=13.57$, $p<.001$) においては残差分析の結果、低群においてのみ、「あてはまる」の残差が有意 ($d=2.1$, $p<.05$) であった。これより、子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は学校や警察に連絡するだろうと考える者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に多いことが認められた。

5. 人の暮らし方

人の暮らし方に関する 5 項目について非行接近傾向水準（低群、中群、高群）×項目の選択（選択、不選択）の条件により、 3×2 クロス集計表を作成し χ^2 検定をおこなった。また、検定結果が有意であった項目については残差分析をおこなった。その分析結果を Table35 に示す。

χ^2 検定の結果、5 項目中 2 項目が有意であった。

『その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす』($\chi^2(2)=6.13$,

Table 35 人の暮らし方について非行接近傾向の水準による比較 χ^2 検定及び残差分析の結果

		選択	不選択	χ^2 検定	有意確率p
1 いっしょうけんめい働き、節約してお金持ちになる	低群	134	312	$\chi^2 = 0.17$ n.s	0.917
	中群	165	407		
	高群	137	329		
2 まじめに勉強して名をあげる	低群	28	418	$\chi^2 = 2.77$ n.s	0.250
	中群	29	543		
	高群	18	448		
3 金や名誉を考えずに、自分の趣味にあった暮らし方をする	低群	180	226	$\chi^2 = 0.12$ n.s	0.940
	中群	236	336		
	高群	193	273		
4 その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす	低群	63 (-2.4) *	383 (2.4) *	$\chi^2 = 6.13$ *	0.047
	中群	106 (0.6)	466 (0.6)		
	高群	94 (1.7)	372 (1.7)		
5 正義をつらぬいて、どこまでも清く正しく暮らす	低群	41 (2.4) *	405 (-2.4) *	$\chi^2 = 6.26$ *	0.044
	中群	36 (-0.6)	536 (0.6)		
	高群	24 (-1.7)	442 (1.7)		

df=2 *p<.05, **p<.01, ***p<.001 n.s: not significant

※ ()の数値は調整済み残差である

p<.05)においては残差分析の結果、低群においてのみ選択の残差が有意 (d=-2.4, p<.05)であった。これより、その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らすことが良いと考える者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に少ないことが認められた。

『正義をつらぬいて、どこまでも清く正しく暮らす』($\chi^2(2)=6.26$, p<.05)においては残差分析の結果、低群においてのみ選択の残差が有意 (d=2.4, p<.05)であった。これより、正義をつらぬいて、どこまでも清く正しく暮らすことが良いと考える者は非行接近傾向低群において偶然に期待される度数より有意に多いことが認められた。

考察

I. 因子の構成

1. 非行接近尺度

近藤（2004）が鑑別所入所少年においておこなった先行研究と同様に2因子構造が確認され、因子の命名についても、それにならい自己中心性、刺激興奮性とした。本研究では先行研究と異なり、両因子に因子負荷量の高かい「いけないと思っても、楽しいことであればやる」、「多少やり方が問題でも、人より目立てば気持ちがよい」を削除して分析をおこなった。本研究の標本は一般中高生であり、鑑別所入所少年はこれらの項目に刺激興奮性を感じ、それに対し一般青少年は刺激興奮性を感じる一方で、自己中心性も感じ取るような認知を有しているといえる。これらの項目は共に道徳的に問題があったとしても快楽を追求する思考を意味しており、一般青少年がこれに対し自己中心性を感じるということは、道徳的な側面に注視する傾向を有していることがうかがえる。つまり、一般青少年は鑑別所入所少年よりも道徳的価値観によって行為を評価する傾向があり、道徳から逸脱する行為に対し抵抗を感じる者が多いことが予想される。

2. 青少年の生活意識と価値観に関する調査票

2-1. 生活満足度に関する項目群

法務総合研究所（2006）が鑑別所入所少年においておこなった先行研究と同様に1因子構造が確認され、因子の命名もそれにならい「生活満足度」と命名した。構造は同様であったが、先行研究における因子負荷量は.38～.56と、どの項目も近い数値であるが、本研究では生き方の満足の因子負荷量は.81と、他の項目（.45～.56）と比較して飛び抜けて大きい。これらのことから、鑑別所入所少年において生活満足度は家庭生活、友人関係、社会、自分の生き方に対する総合的な満足と捉えているのに対し、一般青少年では自分の生き方に対する満足度を生活満足度と捉える傾向があると言える。

また、鑑別所入所少年においては生き方の満足の因子負荷量は.38であり、一般青少年と生き方に対する意識の差が大きいということもうかがえる。つまり、一般青少年においては自分の将来を見据え自省的に現在の自分を評価する傾向がうかがえるのに対し、鑑別所入所少年においては自分に生き方あまり関心が無く、享乐的・刹那的に生活を送っている様子が想像される。このことは本研究の分析モデルにおける刹那的価値観の非行接近傾向への影響を支持するものと思われる。

2-2. 対人感情に関する項目群

法務総合研究所（2006）が鑑別所入所少年においておこなった先行研究では、3因子構造（劣等感因子、無力感因子、不信感因子）であったが、本研究では多因子構造をうまく確定できず、1因子構造を採用し、その因子を「孤独感」と命名した。これについて、この項目群はネガティブな感情に関する質問が多く、鑑別所入所少年においては自省を促す環境で調査がおこなわれているため、自分のネガティブな感情が整理できていることが考えられる。また、一般青少年については自分の感情について考える機会は少なく、整理できていないため、このような結果となったことが考えられる。しかし、その一方で対人感情の項目群から孤独感因子のみが抽出され、「自分は何をやってもだめな人間だという感じが」、「自分は世の中から取り残されているという感じが」、「自分の性格がいやになるという感じが」という項目の因子負荷量が高い値を示している。このことから、一般青少年は他者との比較による劣等感や周囲に対する無力感から孤独感を感じ取るような、内省的な素地を有する傾向があるのかもしれない。

2-3. 態度・価値観に関する項目

法務総合研究所（2006）が鑑別所入所少年においておこなった先行研究では、2因子構造（自己優先的態度因子、状況依存的態度因子）であったが、本研究では多因子構造をうまく確定できず、1因

子構造を採用し、その因子を「刹那的価値観」と命名した。これについては前述のように、鑑別所入所少年と一般青少年とでは調査をおこなった環境の差異が影響している可能性が大きいことも十分に考えられる。

また、この因子は周囲からの干渉を拒否することや、自己中心的、享乐的な思考を問う項目から構成されている。このことから、一般青少年においてはこのような思考を統合的に捉える認知を有していることがうかがえる。

2-4. 同世代の者に対する見方に関する項目群

1 因子構造が確認され、同世代の問題行動に関する項目から構成されているため「同世代への非行イメージ」と命名した。この中の項目で『自分がよければ、少しくらい人に迷惑をかけてもかまわないと思っている人は』の因子負荷量が.73 と他の項目の値.55～.66 と比較して、やや高い値となっている。この項目は自己中心性に関するもので、一般青少年は同世代の者における問題として自己中心的な思考や行動を重視していることがうかがえる。

近藤（2004）は自己中心性や刺激興奮性が強まるほど非行行動が多く出現する傾向が有意であるとしているが、以上のことから一般青少年は同世代における問題についての的確に把握し、それを問題視している者も多いと予想される。

Ⅱ．非行接近傾向における生活意識及び価値観の影響モデルの検討

1．校種間の差の検討

配置不変が確認され、中学生・高校生において構造は同じであるが母数が異なるというモデルが受容された。この2つのモデル比較から中学生において生活満足度は非行イメージ、孤独感、利他的価値観に直接影響を与えているが、高校生になると生活満足度は直接非行イメージ、利他的価値観に影響を与えず、孤独感を介して影響を与えることが分かった。これは、中学生においてはまだ自我が確立されておらず家庭、友人関係など生活の不満やつまづきが直接様々な生活意識に影響を与えていると考えられる。孤独感是自己に対する否定的な感情を含んだものであり、同世代への非行イメージや利他的価値観は他者や社会など周囲への否定的感情の現れとも考えられる。高校生になると、ある程度自我が安定するようになり、生活における不満が直接周囲等外へ向くのではなく、まず内省的に自己へ向くのではないのだろうか。そして、その不満は自己の中で様々な感情を引き起こし、その中のいくつかが非行接近傾向に影響を与えるということが、この分析モデルからうかがいとれる。

また、非行接近傾向が自己中心性、刺激興奮性に与える影響については、中学生では非行接近傾向の高まりは自己中心的な思考・態

度として現れやすいが、高校生になると刺激や、快楽を求めるような思考・態度へ現れるようになることが確認された。これは、高校生になると非行文化等との接触機会が増え、非行的な思考が行動化しやすくなることを意味しているのかもしれない。また、このことは不純異性交遊、薬物の使用、暴力、暴走行為等の行動化が高校生では顕在化しやすくなることを裏付けている。

非行接近傾向の決定係数については中学生のモデルと比較して高校生のモデルでは低い値となっており、非行接近傾向がこのモデルで説明される割合が低下していることが認められた。これは、加齢とともにモデル以外の意識や価値観、非行文化との接触による文化的感染など他の要因の影響が大きくなることを意味していると考えられる。本研究の観測変数の構成からはその要因を見いだすことが出来なかったが、最近の非行少年の特質を踏まえ、生活意識や価値観に関するより幅広い調査をおこなうことにより、その変数を特定することが今後の大きな課題といえる。

2. 性差の検討

男女の比較モデルにおいては、観測変数の誤差分散と孤独感、利他的価値観、非行接近傾向の切片にのみ差異を認めるモデルが採択された。これより、男女間において共分散構造にはほとんど差はないが、平均構造には差があることが確認された。孤独感の切片は女

子の方が有意に高く、非行接近傾向の切片は男子の方が有意に高いことが確認された。切片は平均値のうち他の変数に影響を受けない潜在的な部分の得点である。このことから、女子の方が潜在的に強い孤独感を有していること、男子の方が潜在的に強い非行接近傾向を有していることがうかがえる。藤岡（2007）は、「男性は、犯罪行動や攻撃行動として『外在化』し、女性は、不安や抑うつ等の精神症状に『内在化』する傾向があると考えられるようになってきている」としている。孤独感は自己に向けられた否定的な側面を持つ感情であるのに対し、非行接近傾向は直接的な行動化を示しているものではないが外部に向けた否定的側面を持つ感情の結果であるとも考えられ、行動化の可能性と捉えることもできる。このことから、本研究の男女モデルにおける平均構造の差異は、藤岡（2007）の主張を支持する結果であるといえる。

また、刹那的価値観の切片について男女間で有意差を断定できなかったが、有意傾向が確認されており、男子の方が潜在的に強い刹那的価値観を有する傾向にあることが分かった。このことは、男子は否定的感情が自己の内面に向かわずに自暴自棄的、刹那的な思考に転化される傾向にあり、分析モデルにおける刹那的価値観と非行接近傾向の関係から問題の『外在化』とも捉えることができ、藤岡（2004）の主張を支持するものと思われる。

3. 分析モデル全般についての総括

いくつかのモデルを構成し検討してきたが、すべてのモデルに共通して確認できたことが、生活満足度から非行接近傾向への総合効果が低いこと、利他的価値観から非行接近傾向へのパスの標準化係数が大きいということである。

生活満足度から非行接近傾向への総合効果が低いということは、それぞれのパスは有意であるものの、生活満足度は非行接近傾向に対し直接的にも間接的にもほとんど関与していないといえる。仮説モデルにおいては間接的な効果を想定したが、結果からは想像よりも遥かに小さなものであることが確認された。平成 17 版犯罪白書（法務総合研究所編，2005）においては友人関係、社会、家族生活に対する満足度について法務総合研究所(2006)の調査結果と第 7 回世界青年意識調査報告（2004）の結果から、非行少年が一般青少年よりも友人関係および家庭生活に対する満足度が低く、社会生活に対する満足度はほぼ同程度と報告している。しかし、非行少年の友人関係、家庭生活の満足度はいずれも 70%を超えており、これらと非行性が直接的にも間接的にも関係しているとは言い難い。本研究における分析モデルはこのことを支持しており、近年における青少年の非行的な思考、問題行動は生活満足度からはほとんど影響を受けていないことが予想される。

また、刹那的価値観から非行接近傾向へのパスの標準化係数が大きく、その影響の大きさがうかがえる。刹那的価値観は内省や悩むことを放棄するものであり、生島（2003）や木村（1998;村松,2002による）は最近の非行少年の特質について、内省力に乏しく悩めないことを挙げているが、本研究における分析モデルはこのことを支持していると考えられる。

Ⅲ. その他の生活意識及び価値観の検討

1. 友人関係

独立性の検定及び残差分析の結果から、非行接近傾向低群において、「相手にけっこう気をつけている」を選択した者は期待される度数よりも有意に多く、「付き合っているのは何か得るものがあるからだ」、「おたがいに張り合う気持ちがある」を選択した者は期待される度数より有意に少ない。このことから、非行接近傾向低群では相手に配慮し、損得なく付き合い、張り合わずに穏便な関係を保とうとする傾向が他の群と比較して強いことが確認された。一方、非行接近傾向高群においては、「付き合っているのは何か得るものがあるからだ」、「おたがいに張り合う気持ちがある」、「おたがいに悪いことは悪いと言ひ合える」、「一緒にいるときでも、別々のことをしている」を選択した者が期待される度数よりも有意に多い。このことから、非行接近傾向高群では友人関係に構築に損得が考慮され、

競争意識を持ち、相手への不満を明確に伝えられる関係であるが、一緒にいても相手の行動に無関心な傾向が、他の群と比較して強いことが確認された。つまり、非行接近傾向高群においては、他の群よりも交友関係に利害を求め、相手と感情を共有する必要性をあまり感じておらず、いわゆる遊びの空間を共有するための関係を求める傾向が強いと考えられる。

2. 大切だと思う友人のタイプ

独立性の検定及び残差分析の結果から、大切だと思う友人のタイプについて非行接近傾向低群においては、「困ったときに助けてくれる人」を選択した者が期待される度数よりも有意に多い。このことから、非行接近傾向低群では困ったときに助けてくれると思う友人を重視する傾向が他の群と比較して強いことが確認された。一方、非行接近傾向高群においては、「困ったときに助けてくれる人」を選択した者が期待される度数よりも有意に少なく、「興味や趣味が似ている人」を選択した者が期待される度数よりも有意に多い。このことから、非行接近傾向高群では自分を助けてくれるか否かよりも、興味や趣味を共有でき、一緒に楽しめる友人を重視する傾向が他の群と比較して強いことが確認された。つまり、前述の友人関係における考察と同様に非行接近傾向高群の者は遊びの空間を重視し、場を楽しめるか否かの判断により交友関係を構築する傾向が他の群よ

りも強いと考えられる。このことは、利他的価値観の表出とも捉えられ、本研究分析モデルにおける利他的な価値観の非行接近傾向への高い影響度を支持する結果といえよう。

3. 周囲の人々との関係

独立性の検定及び残差分析の結果から、気楽に話ができたり、悩みを打ち明けられる周囲の人として、父親、母親、兄弟等の家族を挙げる傾向は非行接近傾向低群において他の群と比較して強く、非行接近傾向高群においては他の群と比較して弱いことが確認された。また、異性の友人・仲間を挙げる傾向は非行接近傾向高群において他の群よりも強く、このことから非行接近傾向高群の者は家族に対し感情の共有や相談をする相手とは考えておらず、その役割を異性の友人に求める傾向があるといえる。

法務総合研究所（2006）の調査において家庭生活に満足と答えた鑑別所入所少年は約 74% で、本研究においても満足と答えた一般青少年は約 68%、非行接近傾向高群に限定した場合も約 60% と非常に多くの者が満足と感じている。このことは、分析結果と矛盾しているように思われるが、家族から干渉されず家庭内で自己の世界を持つことに満足を感じていることが背景にあるとも想像できる。つまり、現在の中学生・高校生の考える家庭生活の満足感とは家族との愛情の結びつきによる円満な関係から生じるものではなく、家庭にお

ける自己の世界の安定を意味しているのかもしれない。もともと、思春期においてこのような心理的傾向は強くなると思われるが、法務総合研究所（2006）によると、年々非行少年の家庭生活における満足度は上昇しており、このことから家族があまり干渉することなく、自己の世界への没頭を許容する家庭環境が増加しつつあることも予想される。

注意されたいということを聞くとする周囲の人として、非行接近傾向低群では父親、母親、兄弟姉妹をはじめとする家族及び先輩、先生、近所の人等、ほとんどについて挙げる傾向が他の群と比較して強いが、非行接近傾向高群ではこれらの人を挙げる傾向が他の群と比較して弱いことが確認された。このことから、非行接近傾向低群では周囲の人々からの注意、忠告を受容し建設的に理解する姿勢を有する傾向が他の群より強く、非行接近傾向高群では周囲の人々からの注意、忠告を素直に受容する姿勢に乏しく、時には無視をするような傾向を有していることが想像される。

4. 生活している環境

独立性の検定及び残差分析の結果から、地域の中でアダルトビデオを借りることや、酒・タバコを買うことについて、あてはまるとした者は非行接近傾向低群において期待される度数よりも有意に少なく、非行接近傾向高群において期待される度数よりも有意に多か

った。また、けんか等の問題行動をおこなったときに地域の人が関与してくることについてあてはまるとした者は非行接近傾向低群において期待される度数よりも有意に多く、非行接近傾向高群において期待される度数よりも有意に少なかった。

以上のことから、非行接近傾向低群では絶対的な人数は少ないが地域社会の教育力を感じ取っている傾向がうかがえ、それに対して非行接近高群では地域社会からの束縛を感じない傾向にあり、虞犯行為に接近している者も、他の群と比較して多い可能性があると考えられる。

5. 人の暮らし方

独立性の検定及び残差分析の結果から、人の暮らし方について非行接近傾向低群では、「その日その日をのんきにくよくよしないで暮らす」を選択した者が期待される度数よりも有意に少なく、「正義をつらぬいて、どこまでも清く正しく暮らす」を選択した者が期待される度数よりも有意に多い。つまり非行接近傾向低群は他の群と比較して、呑気で無責任な暮らしに否定的な見方をし、道徳的な暮らしを選択する傾向が強いということが確認された。このことは、非行接近傾向低群において刹那的価値観を有する傾向が他の群よりも低いとも考えられ、本研究の分析モデルにおける刹那的価値観から非行接近傾向へのパスの有意性を支持するものだと考えられる。

結論

・非行接近傾向における生活意識及び価値観の影響モデルは受容され、校種間、男女間において差が確認された。校種間の差については中学生において、生活満足度は非行イメージ、孤独感、刹那的価値観へ影響を与えているが、高校生では生活満足度は孤独感を介して非行イメージ、刹那的価値観に影響を与えていることが示された。また、高校生になると非行接近傾向が刺激興奮性に与える影響が大きくなることも示された。男女間の差については孤独感の切片が女子で高い値を示し、刹那的価値観と非行接近傾向の切片は男子のほうが高い値であることが示された。

・非行接近傾向における生活意識及び価値観の影響モデル全般については、非行接近傾向に対し、生活満足度はほとんど影響を与えていないが、刹那的価値観の影響は大きいということが示された。

・その他の生活意識及び価値観では、大切だと思ふ友人のタイプ、人の暮らし方の項目群について分析モデルにおける刹那的価値観の非行接近傾向への影響を支持する結果が示された。また、周囲の人々との関係項目群から生活満足度の高まりは、子どもに干渉せず自己の世界への没頭を許容する家族の増加の可能性が示された。

要約

本研究は現代の非行における特徴から、生活満足度は直接非行接近傾向に結びつかず、他の生活意識や価値観を介して影響を与えているという仮説を提案した。また、非行少年と一般青少年との境界が曖昧になってきていることも考慮し、調査対象として中学生・高校生を選択し、仮説についての検討をおこなった。

共分散構造分析の結果、生活満足度は非行接近傾向に対して間接的にもほとんど影響を与えていないことが示され、仮説は立証されなかった。また、仮説に基づいた分析モデルの中で非行接近傾向に大きな影響を与えているものは利他的価値観であることが判明した。

分析モデルからはその他、いくつかの重要な示唆を得ることができた。まず、中学生との比較から高校生において、生活満足度は同世代への非行イメージ・利他的価値観に直接影響を与えず孤独感を介して影響を与えること、非行接近傾向の刺激興奮性への影響が大きくなることが示された。男子と女子においては平均構造が異なっており、孤独感は女子が高く、利他的価値観と非行接近傾向は男子が高いという結果が示された。また、他の生活意識及び価値観の検討から、この分析モデルを支持する結果がいくつか得られた。

参考文献

- Bartol,Curt R.,Bartol,Anne M. 2005 Criminal Behavior:A Psychosocial Approach(7th Edition) (羽生和紀監訳,横井幸久・田口真二編訳 2006 犯罪心理学—行動科学のアプローチ 北大路書房)
- 藤岡淳子 2007 犯罪・非行の心理学 有斐閣ブックス
- Gray,J.A. &McNaughton,N. 2003 The Neuropsychology of anxiety. Second edition: Oxford University Press.
- 萩原恵三 2000 現代の少年非行 大日本図書
- 法務総合研究所 2005 平成17年度版犯罪白書—少年非行—
- 法務総合研究所 2006 研究部報告 32—最近の非行少年の特質に関する研究—
- 影山任佐 2000 犯罪精神医学研究 金剛出版
- 警察庁生活安全局少年係 科学警察研究所防犯少年部 2000 最近の少年による特異・凶悪事件の前兆等に関する緊急調査報告書
- 木村 敦 1998 報告【現代の非行少年を考え】について—作成の経緯とその問題意識—
- 近藤日出夫 2004 非行接近／抑制尺度の作成および非行との関連の検討 Jap.J.Crim.Psychol,Vol.42.No1

松井洋・中村真・堀内勝夫・石井隆之 2005 非行的態度の抑制要因に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第 16 巻 第 1 号 227-44

McDonald, R.P.P. 1978. Generalizability in factorable domains: "domain validity and generalizability". Educational and Psychological Measurement, 38, 75-79

村松 励 2002 少年非行：最近の動向「臨床心理学特集非行臨床」 8, 154-162

内閣府政策統括官（総合企画調整担当） 2004 第 7 回世界青年意識調査報告書

岡田幸之・松本俊彦・千葉泰彦・酒井健ほか 2006 平成 16 年度一般研究助成最優秀論文行為障害と非行および注意欠陥障害/多動性障害と反社会性人格障害との関連に関する研究 社会安全(60), 6-15

生島 浩 2003 非行臨床の焦点 金剛出版

豊田秀樹 2003 共分散構造分析（疑問編）—構造方程式モデリング— 朝倉書店

Wallace, C.D., Douglas, K.S., Eavers, D., & Hart, S. 1997. HCR-20: Assessing risk for violence, version 2. Simon Fraser University

山本嘉一郎・小野寺孝義ほか 1999 Amos による共分散構造分析と解析事例 ナカニシヤ出版

謝 辞

本研究の調査にあたり、ご協力していただきました調査協力校の教職員ならびに生徒の皆様方に心より感謝申し上げます。また、論文の作成にあたりご指導いただきました内田利広准教授をはじめ、諸先生方に厚く御礼申し上げます。

調査へのご協力をお願い

この調査は、みなさんがどんなことを思ったり、感じたりしているかについて、おたずねするものです。結果は、全体をとりまとめてあつかいますので、名前を記入する必要はありません。また、研究以外の目的には使いませんので、どうぞ、ありのままに答えてください。

ご協力いただけるようでしたら、年齢と校種、性別をご記入の上、つぎにおすすみください。

京都教育大学 大学院 学校教育専修 教育臨床心理学コース

北口 嘉憲

指導教員 内田 利広

2007年4月1日における 年齢 () 歳

校種 (中学 全日制高校 定時制・通信制高校)

性別 (男 ・ 女)

これから、家庭や友達、ものごとの考え方や感じ方などについて、お聞きします。

答えの書き方は、あてはまるものひとつに○をつけるか、あてはまるものすべてに○をつけるかのどちらかです。まちがわないように注意してください。

Q 1 あなたは、家庭生活に、どのくらい満足していますか。次の中から、ひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

1 満足 2 やや満足 3 どちらともいえない 4 やや不満 5 不満

Q 2 あなたは家の中で、次（アーキ）のことを感じたり、思ったりしたことがありますか。
次の中から、ひとつだけ選んで番号に○をつけてください

ア 家族との話を楽しいと感じることが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

イ 家では自分の部屋にひとりでいたいと思うことが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

ウ 自分の将来について親に話したいと思うことが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

エ 自分が何をしていても、親があまり気にしないと感じが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

オ 親がきびしすぎると感ずることが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

カ 親のいうことは、気まぐれであると感じることが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

キ 親が自分のいいなりになりすぎると感じが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

Q 3 あなたは友達づきあいに、どれくらい満足していますか。次の中からひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

1 満足 2 やや満足 3 どちらともいえない 4 やや不満 5 不満

Q 4 あなたと、友だちの関係について、次の中からあてはまるものをいくつでも選び、番号に○をつけてください。

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 悲しいことがあったら話を聞いてもらう | 2 相手にけっこう気をつかっている |
| 3 あまり深刻な相談はしない | 4 付き合っているのは、何か得るものがあるからだ |
| 5 おたがいに張り合う気持ちがある | 6 けんかをし合える |
| 7 何を言わなくても、分かり合えている | 8 おたがいの性格は裏の裏まで知っている |
| 9 自分のすべてをさらけ出すわけではない | 10 おたがい悪いところは悪いと言い合える |
| 11 一緒にいるときでも、別々のことをしている | |

Q5 あなたは、どんな友だちが大事だと思いますか。次の中から一番大事だと思う友だちのタイプをひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

- | | | | |
|---|---------------------|---|--------------------|
| 1 | いつもそばにいて相手になってくれる人 | 2 | 他の人に言えないことを聞いてくれる人 |
| 3 | 競争相手となって自分を伸ばしてくれる人 | 4 | いろいろな情報を教えてくれる人 |
| 5 | 困ったときに助けてくれる人 | 6 | 興味や趣味が似ている人 |

Q6 あなたにとって、次の質問（ア～エ）にあてはまる人はどんな人ですか。あてはまる人を何人でも選び番号に○をつけてください。

ア あなたが、気楽に話ができると思うのはどの人ですか。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----------|----|-----------|----|--------------------|----|-------|
| 1 | 父親 | 2 | 母親 | 3 | 兄弟姉妹 | 4 | 祖父母（おじいちゃん・おばあちゃん） | | |
| 5 | 親戚の人 | 6 | 同性の友だち・仲間 | 7 | 異性の友だち・恋人 | | | | |
| 8 | 先輩 | 9 | 先生 | 10 | 近所の人 | 11 | その他 | 12 | 誰もいない |

イ あなたが、悩みをうちあけられると思うのはどの人ですか。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----------|----|-----------|----|--------------------|----|-------|
| 1 | 父親 | 2 | 母親 | 3 | 兄弟姉妹 | 4 | 祖父母（おじいちゃん・おばあちゃん） | | |
| 5 | 親戚の人 | 6 | 同性の友だち・仲間 | 7 | 異性の友だち・恋人 | | | | |
| 8 | 先輩 | 9 | 先生 | 10 | 近所の人 | 11 | その他 | 12 | 誰もいない |

ウ あなたが、「この人から注意されたら言うことを聞く」と思うのはどの人ですか。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----------|----|-----------|----|--------------------|----|-------|
| 1 | 父親 | 2 | 母親 | 3 | 兄弟姉妹 | 4 | 祖父母（おじいちゃん・おばあちゃん） | | |
| 5 | 親戚の人 | 6 | 同性の友だち・仲間 | 7 | 異性の友だち・恋人 | | | | |
| 8 | 先輩 | 9 | 先生 | 10 | 近所の人 | 11 | その他 | 12 | 誰もいない |

エ あなたが、「こんな人になりたい」と思うのはどんな人物ですか。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----------|----|-----------|----|--------------------|----|-------|
| 1 | 父親 | 2 | 母親 | 3 | 兄弟姉妹 | 4 | 祖父母（おじいちゃん・おばあちゃん） | | |
| 5 | 親戚の人 | 6 | 同性の友だち・仲間 | 7 | 異性の友だち・恋人 | | | | |
| 8 | 先輩 | 9 | 先生 | 10 | 近所の人 | 11 | その他 | 12 | 誰もいない |

Q7 あなたの生活している環境について、次（ア～オ）のことが、どれくらいあてはまりますか。次の中からひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

ア 近所の大人の人は、道であつたら、気軽に私に声をかけてくれる

- | | | | | | |
|---|-------|---|-----------|---|---------|
| 1 | あてはまる | 2 | だいたいあてはまる | 3 | あてはまらない |
|---|-------|---|-----------|---|---------|

イ 地域の中で、アダルトビデオやエッチな雑誌を買ったり、借りるのは簡単だ

- | | | | | | |
|---|-------|---|-----------|---|---------|
| 1 | あてはまる | 2 | だいたいあてはまる | 3 | あてはまらない |
|---|-------|---|-----------|---|---------|

ウ 地域の中で、酒やたばこを買うのは簡単だ

- | | | | | | |
|---|-------|---|-----------|---|---------|
| 1 | あてはまる | 2 | だいたいあてはまる | 3 | あてはまらない |
|---|-------|---|-----------|---|---------|

エ 子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は注意してやめさせるだろう

- | | | | | | |
|---|-------|---|-----------|---|---------|
| 1 | あてはまる | 2 | だいたいあてはまる | 3 | あてはまらない |
|---|-------|---|-----------|---|---------|

オ 子どもがなぐりあいのけんかをしていたら、まわりの人は学校や警察に連絡するだろう

- | | | | | | |
|---|-------|---|-----------|---|---------|
| 1 | あてはまる | 2 | だいたいあてはまる | 3 | あてはまらない |
|---|-------|---|-----------|---|---------|

Q 8 人の暮らし方について、いろいろな考え方がありますが、次の考え方の中で、あなたはどれを選びますか。一番よいと思うものをひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

- 1 いっしょうけんめい働き、節約してお金持ちになる
- 2 まじめに勉強して名をあげる
- 3 金や名誉を考えずに、自分の趣味にあった暮らし方をする
- 4 その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす
- 5 正義をつらぬいて、どこまでも清く正しく暮らす

Q 9 あなたは今の社会について、どのくらい満足していますか。次の中からひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

1 満足 2 やや満足 3 どちらともいえない 4 やや不満 5 不満

※4 または 5 の答えの人は、つぎのQ 10 の質問に答えてください。

1、2、3 の答えの人は、Q 11 へ進んでください。

Q 10 「やや不満」、「不満」とのことですが、それはどういう理由からですか。
次の理由の中で、あてはまるものをいくつでも選び、番号に○をつけてください。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 社会のしくみが決まりきっている | 2 若者の意見は反映されない |
| 3 正しいと思うことが通らない | 4 国民の意見がまとまっていない |
| 5 金持ちと貧乏な人の差が大きすぎる | 6 まじめな者がむくわれない |
| 7 人々の考え方や行動が乱れている | 8 その他 |

Q 11 あなたは、次の意見（ア～エ）に賛成ですか。それとも反対ですか。次の中からひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

ア 「ひとつのことに熱中するよりも、いろいろなことをやってみるべきだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

イ 「年上や目上の人にはしたがうべきだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

ウ 「コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

エ 「自分の意見とちがっていても多数の意見にはしたがうべきだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

オ 「自然を守ることも大切だが、生活を便利にする方がもっと大事だ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

カ 「人のことにはあまり深入りしない方がよい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

キ 「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

ク 「世の中は、なるようにしかならないものだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

ケ 「まじめな人よりも、ひょうきんにふるまう人の方が好きだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

コ 「まわりから何か言われないように、目立たないようにする方がよい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

サ 「正義をつらぬくためには、場合によっては力にうったえてもよい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

シ 「世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

ス 「自分のやりたいことをやり抜くためには、ルールを破るのもしかたがないことだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

セ 「人のおこなうべき正しい道や愛情を大切にすべきだ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

ソ 「努力するよりも、要領よくふるまう方がよい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

タ 「リーダーになって苦勞するよりは、人にしたがっていた方が気楽でいい」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

チ 「将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

ツ 「自分がどうなろうと私の勝手だ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

テ 「ボランティア活動などを通じて、世の中のためになることが必要だ」

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

**Q12 あなたは、日ごろの生活で、次（ア～シ）のような感じになることがありますか。
次の中から、ひとつだけ選んで番号に○をつけてください。**

ア 世の中には自分しか信じる者がいないという感じが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

イ 世の中は結局、金だけがたよりだという感じが

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

ウ 心のあたたまる思いが少ないという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

エ 自分の性格がいやになるという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

オ 自分は何をやってもだめな人間だという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

カ 自分は世の中から取り残されているという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

キ 自分だけが悪く思われているという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

ク 自分は意志が弱いという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

ケ 自分がものごとに打ち込んでいるという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

コ 自分はたよりにされているという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

サ 自分の努力がだんだん実ってきているという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

シ 世の中の人々は互いに助け合っているという感じが

- 1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

**Q13 あなたは、あなたと同じくらいの年の人について、どう思いますか。次の中から、
ひとつだけ選んで番号に○をつけてください。**

ア 今、この場が楽しければそれでよいと思っている人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

イ 気に入らないことがあると、カッとしたり、落ち込んだりする人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

ウ いやなことがあっても、すぐ忘れようとする人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

エ 他の人にどう思われているか、気になる人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

オ 大切なことであっても、まじめに考えずにごまかしてしまう人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

カ 自分がよければ、少しくらい人に迷惑をかけてもかまわないと思っている人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

キ いつもだれかと一緒にいたいと思っている人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

ク 悪いことだと思っても、仲間と一緒にになるとやってしまう人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

ケ 超能力や占いなどを信じる人は

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

Q14 あなたは、今の自分の生き方にどのくらい満足していますか。次の中からひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

- 1 満足 2 やや満足 3 どちらともいえない 4 やや不満 5 不満

Q15 以下のこと（ア～シ）について、それぞれ現在の自分にあてはまると思えますか。次の中からひとつだけ選んで番号に○をつけてください。

ア みんなではめをはずすときに興奮を感じるほうだ

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

イ 自分のためなら、多少人の迷惑になることでもやるほうだ

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

ウ 他の人がいやな思いをしても、自分のためならやってみるほうだ

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

エ 欲しいものを手に入れるためには、人から注意されても気にしない

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

オ 多少はめをはずしても、興奮することのほうが楽しい

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

カ 計画的にやるより、その場その場の楽しさを追い求めるほうだ

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

キ 他の人を困らせても、自分のしたいことをする

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

ク やりたいことをやるには、人が多少困ってもしかたがないと思っている

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

ケ 多少まずそうなことでも、いろいろな経験をすることは面白い

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

コ 人が嫌がっても自分の願いをかなえることを優先する

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

サ いけないと思っても、楽しいことであればやる

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

シ 多少やり方が問題でも、人より目立てば気持ちがよい

- 1 あてはまる 2 ややあてはまる 3 ややあてはまらない 4 あてはまらない

アンケートは以上です。すべての質問に答えているか、確認してください。

ご協力ありがとうございました。